
今日から僕は退魔師なのか！？

確認のためいっておきますが僕どらえもんじゃないです。

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日から僕は退魔師なのか！？

【Nコード】

N3561V

【作者名】

確認のためいっておきますが僕どもんじやないです。

【あらすじ】

よく出来た家庭に生まれた男子高校生、篠崎零。しのざきれいの妹、篠崎愛美。しのざきまなみは、突拍子もなく、食事中に零の目の前で消え去ってしまう。妹が消えた穴に飛び込むと、そこには見たことのない世界が広がっていた。必死になって妹の名を呼ぶが、零の叫びは愛美には届かず、変わりといったはなんだが、魔族をひきよせてしまう。囲まれる零。殺される。そう思った矢先、巨大な狐が現れ、魔族を瞬殺した。狐は一人の青年のもとに擦り寄り、金色に輝いたかと思うと、17歳→18歳の黒髪少女に姿を変えるのであった。零は最愛の妹を見つ

け出し、平凡な日常に帰ることが出来るのか。 萌え。

〜1〜

「お兄ちゃん起きて、朝だよー、ご飯だよー」

いつものように愛美が僕を起こしにきた。

母さんがいうには僕を起こしたから、僕より10分はやくおきているらしい。可愛いやつめ。いったい何歳まで起こしてくれるかなあ、そんなこと考えるとお兄ちゃんもう寂しくて涙が出ちゃうよ。

愛美は小学2年生の7歳。幼いながらに女の子らしい可愛い顔としぐさをしていて、将来が楽しみな僕の自慢の妹だ。僕が自慢できることといったら、妹に慕われていることぐらいだろうか。

「愛美おはよう。今日も起こしてくれてありがとね。」

そういつて頭を撫でてやる。すると決まって愛美は、満面の笑顔で、どういたしまして。と言う。日課だ。

ボサボサの頭を少し？き、布団から出る。制服に着替えた後、愛美に手をひかれ、洗面台に向かう。顔を洗い、寝癖を直す。そしてまた愛美に手をひかれ、リビングに向かう。日課だ。

「おはよう」

「おはよーママー」

「はいはい二人ともおはようございます。毎日仲がよくてよろしいですね」

朝食を作っている母さんに挨拶をする。この匂いからすると、ベーコンエッグとトーストかな。

「愛美はお兄ちゃん大好きだよ！」

「僕も大好きだよ。まったく、いつまで僕を慕ってくれるのかなあ。怖くて夜も眠れないや」

「ほんとよね。まあ15、6になっても兄妹ベツタリだったらちよつと困るけど」

「愛美はずつとお兄ちゃんと一緒にだよ！16歳になっても26歳になっても100歳になっても。お兄ちゃんも約束してね」

「はいはい、約束しますよ」

「指切拳万嘘ついたら針千本のーます、指きつた」

「これで嘘ついたら針千本だからね！」

「了解しました」

そんなこんなで朝食が出来上がった。やはり僕の嗅覚に間違いはないようだ。

ゝ1ゝ
(後書き)

勝手にランキングをクリックしていただけると嬉しいです！

「いただきます。父さんはもう仕事？」

「今日は東京で会議があるっていったから5時ごろにはもう家を出たわよ。」

「そうなんだ。忙しいんだね」

「稼いでくれて結構結構。朝ご飯作るのが少し大変だけどね」

「パン焼いて食べてとか言っておけばいいのに」

「早くから仕事があるのに、パンだけじゃ体がもたないでしょ。朝ごはん作って、間食のおにぎりをもたしてます。それが家庭を守り、父を支える母の仕事に対するプライドってもんよ。ふふふ」

母さんは所謂いわゆる専業主婦だが、自分が専業主婦であることに誇りを持っている。

よくテレビで主婦の仕事を同じ時間だけ業者に頼んだら2000万円かかる、などと豪語している専業主婦がいるが、お前らは業者並みのクオリティを出しているのかと問いたい。掃除も埃ひとつない状態を常にキープし、風呂はカビなし、食事はいつでも時間を合わせ、体調管理を含めた最高の味付け。安い食材を買い、おいしい料理を作る。子供をまっすぐになるようしっかりと育てる。これらのことをしているのか。同じ専業主婦だと思われたくない。よくそうつぶやいている。なぜなら母さんはしっかりとやっているからだ。もちろん業者クラスとまではいかないが、手を抜かず、母として出来る最高の仕事をしていると僕も思う。専業主婦に資格つけてくれないかなあ。私絶対1級なのに。ともよく言っている。

そんなこんなで父さんは母さんに首つ丈だ。母さんの努力もあり、父さんはすすく出世、僕たちも心身ともに健康に育った。月の一度母の日というのがあって、その日母さんは休みになる。家事全般を父さんと兄妹でこなし、母を労うのだ。僕たちの家庭は幸せだと

思う。いや、間違いなく幸せだ。明日は母の日。父さんは出張で疲れているだろうし、久しぶりに母と父の日にして、兄妹で労ってやろうかな。

「すごいよ母さんも父さんも。そういえば明日は母の日だね」

「あら、そうね。でも今日出張で疲れてるだろうし、いいわよってメールしとく」

「いいよ、母さんだって休みがほしいでしょ？」

「言っただって、父さんみたいに満員電車で揺られて休憩は昼だけで上司に頭さげてるわけじゃないのよ。家事の合間にテレビ見てるし、掃除中は音楽聴いてるし。たまに友達と飲みにいたり遊びにいたりもしてるしね。父さんのがずっと大変よ」

「母さんはまじめだなあ。でも母さんにはフルで休める休日はないでしょ。じゃあ明日は久しぶりに父と母の日にするよ。いいよね愛美」

「うんうん、それがいいよ！愛美カレー食べたい」

「じゃあ一緒に作るっか」

「我ながらいい子達に育ったわあ。さすが私たちの子供ね。さっそくメールしとくわね」

ゝ2ゝ
(後書き)

勝手にランキングをクリックしていただけると嬉しいです！

く3く

嬉しそうに父さんにメールを打ち始める。僕は最後のハムエッグを口にして、デザートヨーグルトに手を伸ばした。

「愛美も食べよつと」

「こら、まだ全部食べ終えてないだろ。デザートは食後にしましよ
うね」

「はい」

「愛美はなんでもお兄ちゃんのマネするわね」

そんな他愛もない会話。こんな日々がずっと続くと思っていた。今の今までは。

みんなが笑顔の食事中、突然愛美の背後に 穴 が出現した。時空の割れ目というのか、ブラックホールというのか、その黒色の塊の中に、愛美は気付かず笑顔のまま吸い込まれた。

「愛美！！」

僕がそう声が出したときには、愛美はこの世界から消えていた。収縮していく穴。パニックになり悲鳴をあげている母さん。気付いたときには、零はその穴にむかって身を投げていた。

永遠に続くんじゃないかと思える、上も下もわからない、暗闇の空間。どちらかというと落ちている、または吸い込まれているように移動しているという感覚のみわかる。わずかに光があったので、そちらをみるとみると、母さんが手をのばしていたが、すぐに閉じてしまった。どんどん落ちていく。

「愛美い、どこにいる？声をだしてくれ！」

「お兄ちゃんー！！」

恐怖に襲われている、涙声の愛美の声が聞こえた。声の先へと体を向ける。しかし、移動の手段が零にはない。

「かならず助けるから、絶対諦めちゃだめだよ！」

「助けておにい……」

愛美の声が突如途絶えた。どこだ、どこに消えた。五感を研ぎ澄ませるが、愛美の気配はどこにもなかった。

「愛美iiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！！」

視界が開けたかと思うと、零は森の中にいた。しかし、どこか様子がおかしい。みたことのない植物や、虫と思われる生き物がいた。木も独特な形をしている。

すぐに愛美を大声で呼んだ。しかし聞こえてくるのは遠ざかる自分のこだました声だけだった。

必死に走り回り、叫び続けた。しかし、聞こえてくるのは自分の声だけ。

足をとめ、息を整える。どこかにいるはずだ。こんなよくわからないところ、零の愛美を一人にするわけにはいかない。

すると、零の背後からガサガサと、草を踏む音が聞こえた。

「愛美？」

期待と安堵にあふれながら振り向くと、そこには自分と同じか、それ以上の背丈があるであろう、みたこともない生物が立っていた。一瞬にして戦慄する表情。あふれかえった筋肉、腕は零の腰周りと等しい太さをもっていた。大きな手に握られた巨大な斧。いわゆるオーガというやつなのだろうか。しかし、そんなものが現実にいるはずがない。現実には……。

「おい、こいつ人間じゃないか？」

「そうみたいだな、食うのは初めてだ」

零はあわてて話しかけた。

「こ、言葉がわかるんですか？あの、ここはどこでしょうか？」

「ここはお前からすると、所謂魔界ってところだろうか。まあそんなことは気にするな、今すぐお前は俺らに食われる」

全速力で走りだす。今殺されるわけにはいかない。なんとしても愛美と見つけ出さなければ。魔界ならなおさらだ。にわかには信じられないが、なによりオーガの存在がこの世界の証明。木々をすりぬけ、走り続ける。しかし、すぐに回り込まれてしまった。

「さあて、そろそろ遊びも終わりにして、いただくことにするか」振りおろされる斧。間一髪のところかわし、斧は木に突き刺さった。謎の液体が木から流れ、木が痛みの叫びをあげた。この世界はマズい。そう直感した。

「おっと、悪いな。へへへ。ちっこいからはずしちまった」

もう一体のオーガに首をつかまれた。殺される。そう思った。零の全細胞が死のイメージをもった。そして死を覚悟した。しかし、脳裏に浮かぶは妹の姿。この世界のどこかで愛美も同じめにあっているかもしれない。そのとききつと愛美は、僕が助けにくることを信じてやまないだろう。全力でオーガの指を蹴り上げた。血が沸き、心臓が高揚し、力がわいてくる。

すべての力を右の拳にやどし、オーガの顔を殴り飛ばす。零の右手は淡く青色に発光し、その光はオーガに触れた箇所にも残り、オーガの頬を焼いた。

「ぐはっ、貴様、退魔師なのか!？」

「こいつを放っておくとやばい、今のうちに殺すぞ！」

同時に襲い掛かってくるオーガ。なんとかかも一度戦おうとするが、さっきの一撃で力を使い果たしたらしい。体が思うように動かなかった。斧を大きく振り上げる。

（愛美、ごめんな、お兄ちゃんもう動けそうにない……）

大粒の涙が頬を伝う。斧が零の首を捕らえようとしたとき、寸前で動きが止まり、かわりにオーガの叫び声が聞こえてきた。

巨大な狐がオーガの腕を噛み千切ったのである。長く美しい淡い黄色の毛並。6尾ある尻尾。2メートルはあるであろうその狐は、頭部を一度下げ、大きく振り上げた。直撃し、吹き飛ばされるオーガ。零の目の前で止まっている斧は、青く強く発光していた。

「りんね 燐音、燃やせ」

一人の青年が青く発光する腕を零に向けられた斧に向けたまま、なにやら言葉を発した。

狐は、凜々しい紅色の瞳を大きく見開いた。その瞬間逃げようとしていたもう一体のオーガが炎に包まれ、焼失した。

「危ないところだったな、ガキ」

青年はそういつて腕を下ろした。空中にとまっていた斧は発光をやめ、地面に落ちた。

巨大な狐は金色に輝きだし、収縮し、やがて人型にかわった。

そこには、長い黒髪をした、赤い瞳の18歳くらいの女の子がいた。黒色のミニスカートに赤色のリボンをしている。まるで制服のようないでたちだ。少女は青年に擦り寄った。

「あの、僕突然この世界に来てしまつて……あ、7歳くらいの女の子をみませんでしたか？僕の妹なんです」

「いや、悪いがみてないな。りんね 燐音、感じるか？」

「私もわからないわ。ごめんなさい」

「そうですか。助けてくれてありがとうございます」

「おい待てよ、一人で歩いてたらまた狙われるぞ。退魔師の素質があるお前ならなおさらだ」

「でも、一刻もはやく妹をみつけないと……こうしているうちにも

どこかで殺されてしまいかもしれない」

涙を流しながら大声を上げた。取り乱している、そんなことはわかっている。

「まあ、俺の仲間に連絡をいれてみる。お前のようにどこかで保護されてるかもしれんぞ」

青年の言葉に、あふれていた涙は勢いを弱めた。

「ほ、ほんとですか！ありがとうございます」

焦燥していた零は少し落ち着きを取り戻す。ヤレヤレといわんばかりに青年は念を送った。

「これで三日以内に連絡がくるはずだ。とりあえず、村まで降りよう」

「ありがとうございます、ありがとうございます！この恩どうやって返したらいいのか……」

「実際、人間で退魔師の素質をもってるやつは少なくてね。貴重なんだよ。どうせもとの世界への帰り方もわかんないだろ？」

「はい……。突然穴が現れて吸い込まれたんです」

「よし、決まりだ。俺は妹を探す手伝いをする。お前は俺に鍛えられながら俺の旅の援護をする。悪い条件じゃないだろ」

「はい、お願いします！」

「ねえねえ、私も話に混ぜてよ」

青年の腕にだきつきながら少女はいった。

「おっと、すまねえ。こいつは燐音^{りんね}、俺と本契約している6尾狐の上級妖怪だ。俺の名はデイド。お前と同じ人間だ」

「僕は篠崎零^{しのざき む}といいます」

「よろしくね、零」

「よろしくな、零」

「宜しく願います、燐音さん、デイドさん」

三人は微笑みあった。絶望しかなかった零に、希望の光が見えた気がした。

〜1〜

「さあて、村についたぞ」

そこにはRPGの世界でよくみるような町が広がっていた。村、というよりも小さな町のほうがしっくりくる。商業が盛んで色々なところで商い（あきな）がおこなわれていた。

「すごい活気ですね」

「私ちよつと用事があるからいくね」

「おう、気をつけてな」

「はい」

隣音はいそいそとどこかにいってしまった。しかし不思議なものだ。どこからどうみても、狐ではなく人間なのだから。姿だけが人間になっているわけではない、生活や考え方まで、すべてが人間と同じようだった。

「よし、まず零の服を買おう。そんな布切れじゃ一発でもくらったら死んじまう」

「でも、僕この世界の通貨を……」

「買ってやるよ。一式そろえてやる」

「ありがとうございます、ほんとに何から何まで」

「いいってことよ。なにせこの世界では人間で退魔師の力をもっているやつは零をのぞいたら5人しかいないんだ。だが、みんな能力はそれはすごいもんがある。この世界にきたとき、零の体も自然と世界と対応したんだろう。だから突然退魔の力を得た。とにかく俺は嬉しいんだ」

「そんな貴重な存在なんですね、僕。でも力の扱いとかわからないし」

「だーから、俺が一から鍛えなおしてやるよ。妹守りたいんだろ？」

「はい。お願いします」

零は深く頭を下げた。

「よっしゃ、じゃあ零はここで待っててくれ。俺が適当にそろえてくるから」

そういつてデイドは商店街に向かった。1時間ほど経過したあと、デイドがもどってきた。

「まずこいつに着替える。特殊な糸で編んである服でな、多少の魔術や妖術なら耐えられるはずだ」

「はい。」

「それと、このグローブをはめる。零が力を発動したのは右手だな。なら右手にはめるんだ。これで何倍も制御しやすくなるはずだ。そら、着替えて来い！」

民家の裏側で着替え、デイドのもとに戻った。燐音が用事からもどってきていた。

「うん、とっても似合ってる」

「ああ、俺のセンスはやはりいいようだ」

「ははは。そういえば、燐音さん用事って」

「ああ、零の妹がいなか探知してたのよ。残念ながらここにもあなたの世界の人間の女の子はいなかったわ」

「え、ありがとうございます！すいません、僕がやるべきことなのに」

「私が探知したほうが一瞬で終わるからいいのよ」

「じゃあ、飯にするとしますか。それが終わったら実践積みに行くぞ、零」

僕のためにこんなに一生懸命になってくれている。なんとか役にたたなくては。そう思った。

「がんばります！」

食事の終えた3人は再び森に向かっていった。

「いいか、やばくなったら俺と燐音で助けに行く。多少の怪我なら俺の回復魔法で治してやれる、恐れず戦ってみろ。オーガは頭が弱点だ、よく狙え」

「はい………そういえば、この世界の力ってどういうのがあるんですか？」

「主にあるのは魔力と妖力だな。その融合した力が退魔力だ。まあそこらへんを意識するのはもっと力をつけてからだ。今は退魔の力をコントロールすることだけを考えろ。いいな」

「はい」

森の奥深く、燐音とダイドは木の遙か上に浮かんでいた。

零が歩みを進めると、すぐにオーガが現れた。都合のいいことに単独で行動しているようだ。

「んー、人間？珍しいな。まあいい、頂くとするか」

ズシンズシンと、巨体を動かし向かってくる。サイズは大きく2Mほどの大きさがあった。

零は右手に意識を集中させる。すると、白色だったグローブがたちまち水色に変わり、零の右腕を光が包みこんだ。オーガはそれを確認したとたん、口から光線を放ってきた。

右手を光線のほうへ向け、防御する。光は広がり、盾のようになって光線をつまかくき消した。

（いけるっ）

「うおおおおおおおー！！」

つよく拳を握り締め、オーガの腹部に右ストレートを打ち込んだ。強い衝撃とともに、オーガの全身を零の光が包み込んだ。

「くそつ、ぐはあ」

倒れこんだオーガに向かいもう一度拳を握る。

「これで終わりだ！」

腕をまとうていた発光は拳に集中し、短いナイフと姿を変えた。

ナイフを投げ、オーガの頭を突き刺す。

オーガは消滅し、ナイフになった光の塊は零のグローブに再び戻っていった。

「はあ、はあ」

息を休める暇もなく、オーガが2体現れた。音につられてやってきたのだろう。

零は一度冷静になるため、木々を抜けて逃げだした。

消耗していた退魔力が回復していき、グローブは光で満たされた。

空中では喜びの声があがっていた。

「戦闘の勘もいいし、頭もきれる。あいつ予想以上だな」

「そうね、あのオーガにも余裕で勝ちそう。私たちの出番はないわ」

「いいことだけだな」

零は木から飛び出し、不意打ちで一体のオーガの頭を直接殴りかかった。光が転移し、消滅する。もう一体のオーガは背丈があったため直接殴れそうにない……右手に意識を集中し、オーガの目の前で強く発光させ、視界を奪った。瞬時に光をナイフに圧縮し、頭部めがけて投げた。うまく突き刺さり、すべてのオーガを消滅させることができた。

「はあ、はあ。このグローブすごい、僕の思ったとおりに光を動かせるみたいだ」

後ろから気配がした。ダイドと隣音だと思い振り返ると、そこには二人ではなく、さらにはオーガではなく、大量の蛇を足にし、女の

上半身と接合されている禍々しい妖怪がいた。

「おっと、あれは完全にまずいね。いきましようダイド」

「さて燐音。ギルジャーネは出会おうと思ってもなかなか出てこない妖怪だ。訓練だと思って戦わせてみよう」

「ちよつとそれは危険じゃない？どう考えたって今の零じゃ勝ち目がないよ」

あわてて燐音がダイドを説得にかかった。

「あいつには時間がない。限界は超えていかなければならないんだ。燐音、いつでも燃やせるよう、擬態を解除しておいてくれ」

「……うん、わかった」

燐音は狐化し、その瞳でギルジャーネをいつでも消し炭にできるよう、凝視した。

（さあ、どうでる、零。）

そのとき零は考えていた。ダイドさんと燐音さんが助けにこない。自分でどうにかしてみせろってことだ。恐怖に震える足を叩き、距離をとった。青黒く変色した裸の女は不気味に微笑んだ。

「おいしそうなもの。みつけ。ちゃった。ふふ。ふ……」

何百匹もいる蛇をつかい、勢いよく零の元につっこんできた。

とつさに光を集め、前方に拡散させる。すさまじい衝撃が零を襲った。直撃は免れたが、衝撃によって木に打ち付けられる。一瞬視界が暗転し、意識が覚醒したところには体を無数の蛇で包み込まれていた。身動きがとれない零。

「いただきまああああああああああ」

女の口が大きく開けられ、零の頭にかぶりつこうとした。

まずい、このままでは食われる。そう思ったとき、右腕が強く発光した。巻きついていた蛇は消滅し、零は地べたに落ちた。

「っち。めんどくさい子供だこと」

そういつてまた蛇を大量に生み出した。本体を切らなければ意味がない。

零は輝く右手に意識を集中し、ギルジャーネに向けた。

青白い光は光線のように零の腕を飛び出し、ギルジャーネを焼き払った。

「や、やった……」

零は力を使い果たし、その場に倒れこんでしまう。

く3く

意識が戻ると、零は村の寝室にいた。上体を起こすと傷が治っていることに気付いた。

「あ、ダイド、目がさめたみたい」

「おお、よくやったぞ零！お前なら倒せると信じていたよ」
背中をバシバシと叩かれる。

「でも本当によくやったよ零。ギルジャーネの蛇に捕らわれたときは、すぐに燃やしちやおうと思ったもん」

「あのとき燃やすの止めて正解だったろ？」

「結果的には、ね」

少し頬を膨らまし、腕を組みダイドを燐音がにらんだ。

「あはは。それにしてもこのグローブすごいですね。力がものすごく制御できるようになりました」

「おう、この村で一番高価なものだしな。むしろグローブなしで初めに力を発動させた零のがすげーよ」

「そうなんです、ありがとうございます」

右手を眺める零。この力があれば、妹を救える。そう思った。

「おう。それに戦闘の中で成長しているってのもある。オーガには勝てる予定だったが、ギルジャーネには負けるかと思っていた。危なくなったら燐音に燃やさせようと思って準備していたぐらいだ。

戦闘の中で限界を超えて成長する、なかなかたいしたやつだよ」

「ほんとよ。私はいつ発動しようかハラハラしてたんだから」

「すいません、心配をおかけしました」

「零に文句をいってるんじゃない、ギリギリまで粘ったダイドにいつてるの！」

「あちゃー、俺か。まあいいじゃん、成長できたし。な！」

「はい！」

「まったく……」

「そうだ、零。朗報だ。お前の妹らしき子供を、俺の仲間が今保護しているらしい。しかし、大分遠い。危険がたつくさんだが、いくか？」

「ほんとですか？もちろん行きます！ああ、よかった、生きてた」
喜びの涙があふれ出た。ずっと心配していたんだ。無理もない。それに僕は運がいい。

もしこの人たちに会わなかったらオーガに殺されていたろうし、万が一生き延びても遠い町に出る手段はない。

「本当にありがとうございます……。そういえば、ダイドさんの願いつて僕がこの世界にとどまって戦うことじゃないんですか？妹と合流して元の世界の戻れたりしたら元も子もないんじゃない？」

「この世界にきちまった原因つてのがな、俺の倒したい妖怪が原因だとにらんでるんだよ。とゆうか間違いない。だが、俺と仲間たちだけではどうにも分が悪い。一人でも優秀な退魔師が味方になってくれたほうがいいんだ。つまり俺たちの利害は一致してるってわけよ。」

「なるほど！僕、精一杯強くなるためにがんばります、ご指導宜しくお願いします！」

「おう。そこでだな、お前も妖怪か精霊と契約しといたほうがいい。俺と隣音はどちらかが自然死するまで契約は切れず、戦闘などで死んだ場合は両方死ぬ本契約だが、本契約してないものは仮契約というものが結べるんだ。心が通いそうな妖怪か精霊がいたら俺に教えてくれよ。まあ先の話だと思うが」

「了解しました。そういえばなんで隣音さんの格好って制服なんですか？」

隣音の頬が赤く染まった。

「ああ、これは俺の趣味だ……！」

ダイドの頬も赤く染まった。ビンタの痕で。

「それは人に言わないって約束でしょ！恥ずかしいっ」

「いててて。まてよ……制服ってことはお前の世界の学生はみんな

こんなエロい格好してるのか？うらやましい！！」
さらに深くダイドの頬が赤く染まったことは言っまでもない。

～1～
(前書き)

やっとこの章で男女比が2:2になります。おまちなねのハーレムまでいましばらくお付き合いください

〜1〜

傷も癒え、零たちは隣町、アクオスにむかっていた。アクオスはその名の通り水が豊富な町で、海に面している港町でもある。

「移動がてら、少し詠唱魔法と簡易魔法を教えてやろう。退魔力だけでの戦闘には限界があるからな」

「はい」

「まず、小さな雷^{いかずち}、炎、水を生む魔法だ。やってみせるから見て覚えろ。これといった呪文はいつようない。退魔力を発動する要領で発動できるはずだ」

ダイドの手の平に小さな電撃と炎、水が浮かんだ。

「こいつに魔力をさらにくわえると、……っほ」

親指ほどしか大きさのなかった自然の力は、柱のように巨大化し、空中に舞った。

「まあ、俺くらいになるとこんぐらいだせるようになる」

「す、すごい」

驚く零と、自慢げなダイドの顔に隣音は少し不服そうにいった。

「契約者なんだからそれぐらいできて当然でしょ！ まったく」

「さっそくタネばらしちゃうか。まあ契約者になるとあらゆる力が上昇するんだ。強力なやつとの契約なら尚更な。よっし、やってみる」

「はい！」

手のひらに力を集中させる。しかし出てきたのはパチパチとはじける小さな静電気だけだった。

「あれ、雷しかでませんね」

「これは簡単だから零くらい退魔力があつたら全部だせてもおかしくないんだがな。うーん、魔力あげてみる」

「はい。だあっ！」

小さかった静電気はたちまち膨れ上がり、カミナリのように爆発した。ダイドの目の前で。

「うわあ危ねえ！俺を殺す気かっ」

「す、すいませんこんなすごいもの出るとは思いませんでした。それにフラフラします」

「たいした魔力もってないのに一気に放出しちゃうからだろ。まあ普通は出力あげる訓練しないと全放出なんてできないんだけどな」

「大丈夫？」

燐音が肩をかしてくれた。華奢な体だが、バランス感覚がいい。とても歩きやすくなった。

「申し訳ないです」

「しかし水と炎はだせないけど電撃なら一級魔術師レベルか。よし、電気系の技を主に使っていこう。何度も魔法をつかってくうちに加減にもなれるし、根本的な魔力もあがつてく。タイプがみえてきたな」

「タイプ？」

「俺は燐音を前で戦わせておきながら、強力な詠唱退魔術で敵を叩く、いわば契約魔術師タイプだ。スキも大きいが、威力もすさまじい。俺の契約相手は6尾狐の燐音だから、安心して身をまかせられるしな」

「なるほど。僕はどうなるんですか？」

「零は、魔力による電撃で敵をいたぶりながら、退魔の力でとどめを刺す戦士タイプだ。契約相手がたらまた話は変わってくるが、とりあえずその方向性で行こう」

「なんか本格的になってきましたね」

「まあな。ゴリゴリ成長していこうではないか。なはは」

「ゴリゴリってなによ。まったくもう」

「燐音はまだ昨日のこと怒ってるのか？」

「怒ってないです！」

「ならいいんだけどね」

「やっぱり怒ってます!!」

「やっぱり。ごめんよ隣音ちゃん。ちゅっちゅ」

「気持ち悪い、離れて。」

「そんな目でにらまれると俺癖になっちゃう」

隣音の右左ストレートがわき腹を直撃した。

く2く

「つきましたね」

「海の匂いが気持ちいいわー」

「俺ベタベタするから嫌い」

腕を伸ばして深呼吸する燐音。雪のように白い肌は太陽の光もよせつけないほど、綺麗に反射していた。

商店街を歩くと、アクセサリー屋があった。

子供のように目を輝かせ、ルビーを眺めている。

「ダイドー、ねえダイドー」

無視して進もうとするダイドの服をつまみ、引っ張る。

「これほしい！」

「ダメだ！この前零の道具そろえたときに大分つかっちまったからな」

「すいません……」

「いや、それはいいんだ。とにかく買わないぞ」

「ダイドのケチっ」

「ケチで結構でございます。ほら、いくぞ」

「はい。」

ダイドはアクオスのギルドハウスに入った。そこでは依頼が受けられ、成功すると報酬が得られる。

「金ねえからな。いっちょ稼ぎますか」

「ダイド大好きっ！！」

いつもひっついていてる燐音がさらにひつついた。この二人は本当に仲がいい。

「現金な子なこと。さあて。どれにしようかなー、おっと。すごい

のがきてるぞ」

「どれですか。うわっ」

そこには妖獣ギガオクトパスの撃破、と書いてあった。

船にのって巨大なタコを倒すらしい。危険度レベルは7をしめしていた。最大は10だ。

「どうする、やるか、零？」

「やります！電撃効きそうですし」

「それでこそ俺の弟子だ。おじさん、これ引き受けますっ」

店員を呼び、手続きを踏んだ。港の船に向かう。

「今回は俺と憐音も最初から戦闘にサポートとして参加する。下級魔族どもとはわけが違うからな。そんなにやばい相手だ、気ひきしめていけよ」

「はい！」

「といつても、基本的にダメージを与えるのは零の仕事だ。俺らは死にそうになったら回復してやるのと、くらったら死にそうな攻撃が来たら相殺するのが仕事だ。いいな」

「お願いします」

「大急ぎで成長してもらうには、死に掛けるくらいが調度いい。今の力で勝てそうになかったら、その戦闘の中で自分の限界を超えてみせろ」

「はい！」

「いい返事だ。よっしゃ、出発ー」

ダイドと憐音とは違う船でオクトパスに向かう。より戦闘しやすいように、だそうだ。

不安もよぎるが、妹をこの世界でも助けられる存在になるためにはこれぐらいやってみせなければ。大きな決意が、零の震えをとめるのだった。

船に揺られること数十分、薄気味悪い霧が立ちこみはじめ、波がいやに静かにゆれ始めた。

「つきましたね。やけに静かで逆に気味悪いです」

「そうだな。こちらへんにいることは間違いないだろう」

「思ってたよりでかいのがいそうね……私が囿になっておびきよせてみるわ」

隣音は狐化し、妖気を放出した。海がうねりはじめ、巨大な渦潮となり、ダイドたちの船を飲み込んだ。ダイドは隣音の背にのり、空中に退避した。

「うわ、船って弁償すんのかな？」

「戦闘による破壊は責任問題にならないからたしか大丈夫よ」

「ならよかった。おーいそろそろ出てくるぞ」

渦潮の中心から衝撃とともに、10Mクラスのタコが出現した。

巨大な8本ある足をうねらせ、零を威嚇する。

大木のように太い吸盤つきの足を零めがけて叩きつけてきた。

電撃を練り、吸盤に打ち込む。白い矢がオオオクトパスの足を焼いた。

大きくのけぞった隙をみて、零は船を動かし、距離をとる。

するとオオオクトパスは口から、黒色の溶解液を吐き出してきた。

零は退魔力を放出し、盾をつくったが、すぐに消滅してしまう。すぐに隣音が対応し、瞳を見開き溶解液を一瞬にして蒸発させた。

「あれは今の零では受けきれないわ！なんとかならないときは私にまかせて」

「ありがとうございます！」

零は退魔力を練りこみ、10本のナイフを空中に作り出した。

オオオクトパスに向かい、ナイフを飛ばす。硬い皮膚を突き破り、

青い血を流しながら刺さった。

「いまだ！あああああああああああ！！！！！」

右手から退魔力を生み出し、左手で電撃を練成する。融合された二つの力は零の手の中で球体となった。右腕を突き出し、一気に力を放出する。球状のエネルギー体から紫色の電撃をまとったビームが放たれた。

オオオクトパスも溶解液を吐き出し、ビームにあらがう。

しかし勢いのます溶解液にビームはおされはじめ。左手で電撃の練成をはじめ。

バチバチと音をたて、力がたまっていく。零は空にいる磷音を見た。ビームの放出をとめる。拮抗していた溶解液が勢いよく零を襲う。

船の先端がとけ、目前まできたとき、磷音が液を焼き払った。すかさず左腕を突き出し、すべての力を電撃にこめた。

巨大な雷の柱がオオオクトパスを襲う。刺さっていたナイフが体内まで電撃を浸透させた。大きく腕を振り下ろし、ナイフをオオオクトパスの体内深くまで突き刺さるよう誘導した。

巨体は倒れ、水面に浮かび上がった。

零は膝をつき、血を吐き出す。魔力不足による急性吐血をおこしていた。

ダイドが零の船に飛び降り、急いで魔力を零の体に流し込む。

「ありがとうございます」

「限界を超える放出はしたらダメだといったろう、体がおいついてない」

「あんぐらいやらないとあいつは倒せそうになかったんで、つい」

「ついで死んじまったら意味ないだろ」

「はい……」

「あと少しでも魔力を放出していたら体の魔力が0になり死んでいたかもしれない。魔力は生命力の一員であることを忘れるな」

「はい……」

「ま！しかし！勝利には変わりない！！よくやったぞ！」

「実はタコの姿みたとき、これは負けたなと思いました……」

「実際、磷音いなかったら液吐かれたときにとかされてたしな。最後の一撃も磷音いなかったら放出する前に跡形もなくきえさってた

だろう」

「ホントです、燐音さんありがとうございます」

「まったくハラハラさせないでよ、ビーム出してるときこっちみたでしょ？ああ、なんかするなと思って緊張したわ、もうっ」

「すいません。でも絶対大丈夫、燐音さんならなんとかしてくれると思ったので」

爽やかな顔で零は微笑んだ。

「そんなかわいい顔しても許さないんだから！もう無理しちゃ嫌よ」

「そうだ、いくら燐音が大妖だからといっても限界がある。もし燐音のミスで死んだら傷つくのは燐音だからな。罪悪感は一生涯消えない」

少し影をもって発された言葉には妙な説得力があった

「はい、すいませんでした……」

「でも信頼し合うことはいいいことだぞ。お互いの力を見極め、ギリギリまで戦闘に集中できるようにする」

「はい」

「それに、戦闘方法は目を見張るものがあつた。退魔のナイフを刺し電撃を体内に流し込んだり、そのあとにそれらを退魔力によつてさらに突き刺しとどめを刺すのも立派だ。先を見据えた戦闘ができる奴は生き残る。これから頭を使っていけ」

「退魔力と魔力の合成を思いついてその場で実行できるのもすごいわ。相当訓練つまないとできないはずよ」

「そうだ、それがあつた！あれは本当にすごい。天才なのかもな零は」

「あんまりおだてないでくださいよっ」

「さ、かえるとするか。」

オオオクトパスの死骸はダイドのもっていた小さな袋にすごい勢いで吸収された。

反省会を終え、船で帰宅する途中、水の中から人魚が20人ほど現

れ、そのうちの一人が話かけてきた。

「あ、あのっ！オオオクトパスを退治してくださってありがとうございます」
「さいますっ」

「お前にいつてんだよ、ボサっとしてんな」

零がキョトンとしてしていると、ダイドが嬉しそうに背中を押した。

「あ、僕ですか？僕ですよ、いえ、その、はい、えーっと」

「もじもじすんなや！男らしく」もう大丈夫、この海の平和は僕が守ったよ」っていつてみせろい」

からかうようにダイドがいうと、隣音はいつものように、ださっ、と毒づいた。

「両親もお姉ちゃんもあいつに食べられてたんです、感謝してもしきれないです」

人魚一同は頭を深く下げた。

「み、みなさんのお役にたてたようで嬉しいです」

頭をポリポリとかきながら、恥ずかしそうに零は言った。

それでは。といい、あとを去った。船を進めっていると、一人の人魚にもう一度声をかけられた。

「あの」

「はい」

ふりむく零。事態を察知し、ダイドはいつにもなく瞳を輝かせた。

「もし嫌でなければ、わ、私と仮契約を結んでいただけませんか？
少しでも勇者様に恩返しをしたいのです」

赤面しながら人魚は願いでた。

「えっと……」

零はこまってダイドのほうをみる。どうしたらよいのかわからなかったのだ。

「もちろん！大！歓！迎！だ！！よかったな零！これでもお前も仮契約者の仲間入りだ」

「あ、宜しく願います」

ペコペコと零は頭を下げる。

「ありがとうございます！精一杯ご奉仕させていただきますね、勇者様っ」

そういつて人魚は零にひれ伏した。ダイドと隣音はそれを見て驚いた。仮契約には上下関係がある。このポーズは最大の敬意、最も主人に忠実であり、心臓を主人に捧げることを誓うポーズだ。このポーズによる契約は自分から仮契約を破棄できないため、なかなか行われない稀な契約である。本当に感謝していることが手にとるようにわかった。

ダイドが呪文を唱えはじめる。

「あつ……んっ」

人魚は艶やかな声を上げた。貝の下着からはみ出るように露出された豊満な胸に刻印が浮かびあがる。

零の親指の爪にも、同じ紋章の刻印がうかびあがった。

すると同時に零の体に変化が起きた。視力、筋力、回復力、体力すべてが上昇したのだ。

「すごい……」

湧き上がる力という力に零は感動を覚えた。

「契約者は契約相手の力を分けてもらえる。その結果、あらゆる基礎能力が上昇するんだ。精神力の上昇によって魔力と大魔力もあがっているはずだぞ。雷一発放ったら気絶なんてことももうないだろう。あの出力でも、2発は放てるはずだ。しかし、過信するなよ」

「ははは、これで気絶しなくてすみそうです。あ、そういえば人魚さん、名前はなんていうんですか？」

「契約者が名付け直すんだよ。今決めてやれ」

「えーと、じゃあ……アクルル、なんてどうでしょうか？あだ名はルルとかで」

「素敵な名です！大事にしますっ」

パアッと顔を明るくし、両手を組んで喜びを表現した。

「俺の名はダイド、契約相手は6尾狐、名を燐音という。仲良くしてやってくれ」

「宜しくね、ルルちゃん」

ずざざつ、とルルは後ずさりした。顔を真っ青にし、畏怖すら感じているようだ。

「6尾狐！？妖怪の中でも最も上位種である大妖じゃないですか！燐音様のような大妖怪、初めてお目にかかりました」

「燐音様だなんて呼ばないで。他人行儀で嫌だからね！燐音って呼んでよっ」

やさしく微笑んだが、ルルの考えは変わらなかった。

「むむむ無理です恐れ多い！！燐音お姉さま、とお呼びしてもよろしいでしょうか？」

「やけに老けて聞こえる響きだね……ルルちゃんは何歳？」

「今年で108歳になります」

それを聞いて零は驚いた。どうみても15〜16の女の子にしかみえないからだ。水色の髪に、大きな瞳、白い肌に女性らしい体。足は魚の尾だったが、とても100歳にはみえない。

しかしそれをきいてダイドはいった。

「プププ……ブッチギリでお姉さんだったな。だって燐音は、よんひゃ」

鬼の形相で燐音がダイドの言葉をさえぎる。髪は逆立ち、熱の風が燐音を中心に吹き荒れた。

「それ以上喋ったら一生口きかないよ！！！」

「はいごめんなさいすいませんでした勘弁してください俺が悪かったです燐音は人間でいえば17〜18歳の見た目なのでまだまだ若いです、むしろ若いですピチピチのキャピキャピです可愛くて美人で知的です」

「……さて。ルルちゃん、やつぱは隣音お姉さまは堅苦しいよ。お姉ちゃん、なんてどう？」

「し、失礼でなければつ。」

可愛い声で零にねだる。ずっと気にしていたんだろう。

「それにしてもダイドさんってなんか距離感じるな。俺のことは師匠と呼んでもいいんだぞ零」

ダイドは嬉しそうにうなずいた。

燐音は涙目で零を見つめた。零は一瞬ドキッとしてしまふ。真っ

「で、でも、呼び捨てにはできませんよ。うーんなんと呼べばいいのか……」

「じゃあお母さんなんてどう？ いやおばあちゃ」

「ぎゃ ああああああああああああああ」

号泣しながら、熱い視線はさらに火力を増させる。

「師匠――――無理です俺じゃ止められません！――しか

ダイドの公開処刑が終わり、アクオスに戻り、ギルドで金を受け取った。

それぞれ小遣いを渡され、1時間の自由時間となった。

「燐音ちゃんごめんねーまだおこってるよね？」

「……」

ブイツとそっぽを向いている燐音。ご機嫌は斜めのようなのだ。

「へへへ、やっぱり。まあこっち見てよ、これなーんだ」

燐音がしかめっ面でダイドのほうを見ると、手にはルビーがおかれていた。

「さっきトイレ行ってくるって言ったときに買ってきといたんだ。

冗談が過ぎた。俺が悪かったよ燐音、許せ」

まっすぐに偽りのない瞳でダイドは燐音を見た。

「いつもダイドはそうやって……ずるいよっ」

そういいながら燐音はダイドに飛びついた。仲直りはうまくいったようだった。

「勇者様、どこにいきますか？」

「その勇者様っていうのやめてよ。なんか恥ずかしい」

「では零様とお呼びしてもよろしいので？ ルル感激です！」

「もうなんでもいいや。えっとね、まず服屋にいった新しい服を買おうかな」

口では文句をいってるようだが、まんざらでもなさそうだった。

「おじさんー、この一番高い服とグローブください」

「あいよ！ おっと、あんたもしかして港のデカダコを退治してくれた人じゃないかい？」

「あ、はいそうです」

「やっぱり！ 町中の人が感謝してるよ。こいつぁお礼だ、受け取ってくれ」

そういつて水色の魔法石の埋まったリングを渡してきた。

「こんな高価なものいいんですか？」

「あんた、隣の人魚と契約してるんだろ？こいつがありや水の力が増す。きつと役にたつよ」

「ありがとうございます、使わせて頂きます」

零はリングを親指にはめ、もう一度礼を言つて、店を出た。

「ルルは欲しいものあるかい？」

「ものではないんですが、零様から人間の姿を想像していただきたいです」

「おつとしまった。そういえばそんなことができるんだったね」

「魚の尾では地上を歩きにくいので、ぜひお願いしたいです。ちなみに今はちよつと浮いて移動してます」

てへつとルルが笑つと、後ろからダイドがやってきた。

「服装はもちろん制服だよな零！」

キツと隣音がにらんだ。しかし様子を見る限り仲直りしたようだ。首にはルビーのネックレスがついていた。

「制服……でもルルに似合いそうでいいですね」

「ルルも隣音お姉様と同じ服装がいいです、可愛いですっ」

「じゃあ決まりで。はいつと」

ルルの魚の尾が足に変わり、水色のリボン付きとミニスカートに包まれた。

「わあっ！ 可愛いです、ありがとうございます零様！」

「よく似合ってるよ」

「うん、可愛いわ」

「やっぱり制服は最高だな、男のロマンだ」

ドガつとすねに蹴りが入った。

「いてて。そういえば零、薬指爪に紋章が入っただろ？」

「薬指？いえ、親指に紋章はありますが」

それを聞いて、ダイドと隣音はひどく驚いた。

「ちよつと見せてみる……ほんとだな。すげえ、零、やっぱりただもんじゃないな」

「え、どういうことですか？」

「本来なら契約出来る相手は一人だけなの。でも親指に紋章がでたつてことは、最大で5人まで契約できるわ。本契約はたぶん一人だけけど」

「初めてみた。これがジョーカーってやつか」

「これすごいんですか？」

「人間ででたのは史上初だ。おめでとう」

「ええっ！めっちゃレアですね、これで少しは役にたてそうです」

「契約者になった時点で、相当な戦闘力だよ。もう零は立派な戦士だ。急いで次の町へ向かうか！」

「はい！」

「どっちにしるあのバカダコ倒さなきゃ進めなかったんだがな」
 ダイドは高速で移動する船に乗りながらつぶやいた。

「まあ、私は零が『やります！』っていうこと信じてたけどね」

「もちろん俺も俺も！」

「零様、勇敢ですつ、素敵ですつ」

「ははは……」

よくほめてくれる二人だけではなく、崇拜されているといっても過言ではない一人が増え、ますます照れ笑いの増える零であった。

少し進むと、ルルの人魚一族が手を振って見送ってくれた。

ルルは少し寂しそうに手を振って、笑顔を向けていた。瞳にはうっすらと涙が浮かんでいるようにも、見えた。

「ルル、僕と契約してくれてありがとう。これでまた一步妹に近づいたよ」

「妹？」

「そうか、いつてなかったね。僕はこの世界の住人じゃないんだ。異世界から、妹を助けるためにやってきたんだ」

「そうだったんですか……」

「もう妹の場所はわかってる、ダイドさんの仲間が見つけてくれたからね」

「精一杯恩返しできるよう、がんばります！」

「うん、ありがとう」

陸が見えなくなり、360度海に変わった。この世界には我々4人しかいないんじゃないかという錯覚が、孤独心をくすぐった。

すると突然水しぶきがおき、100Mほど先の海面からオオオクトパスの群れが現れた。20体、は確実にいるだろう。

零はさっそく電をためはじめた。しかし、零の目前にずっとダイドの手がおろされた。

「このごろ連戦続きだろ。たまには休ましてやる。この数零にはちときついしな。よくみとけよ。燐音！」

はいっ、と凜とした声が響き、6尾の狐に変化した。その背にのり、群れにダイドたちは突っ込んだ。

ダイドが空に手の平を仰ぐと、快晴だった青に、ゴロゴロと雷雲が立ちこみはじめた。

燐音とダイドの体が強烈な青に発光し、その雲に光が送られた。

雷雲は轟々と立ち込み、激しい落雷がオオオクトパスを襲う。

すべてのオオオクトパスは気絶し、海にプカプカと浮かんだ。

「ふう、楽勝だったな」

「すごい……これが本当の魔術師の力なんですね」

「いや、まだまだ本気の10分の1も出してないぜ」

「オオオクトパスをみてごらん。みんな殺さず気絶してるだけだよ。もともとここに生息してるんだから、殺生はしない、ダイドの優しさよ」

「ほんとだ。僕は殺されないよう精一杯で加減とか出来ませんでした」

「アクオスのやつはアレでよかったんだよ。町荒らしてたしな」

「なるほど」

「ま、もっとすごい技いろいろあるから、楽しみにしとけよー」

「調子にのらないの！」

「はい」

そうこうしてる間に船は目的地に着いた。ここは魔族がうじゃうじやと蔓延^{はびこ}る、孤島だ。もともとは人類が住んでいた島らしいが、魔

族に占領されてしまったらしい。ダイドにギルドから直接この奪還を命じられ、やってきたのだ。

しかし、空気が悪い。所謂瘴氣いわずというものだろうか。ずっとこの島にいたら、体を悪くしそうだ。

島に降り立つと、さっそく敵が現れた。ブクブクを沸騰しているようにみえる、ゼリー状の塊が7体。

「そいつらは弱点は水だ。さっそくルルと一緒に倒してみろ」

零の親指の紋章が水色に光った。

「ルル！」

「はいっ」

ルルの擬態が解除され、甘美な人魚の姿となった。ルルが大きく腕を振ると、爪から水の刃が現れ、ゼリーを寸断した。しかし、千切れたゼリーは再びくつき、一体の大きなゼリーとなった。ブクブクと沸騰し、嫌な熱気が立ち込める。

「ルル、切り裂くだけじゃだめだ、水の柱で倒そう」

「了解です」

ルルの両掌から水球があらわれ、ゼリーを挟むように移動させた。

零がルルに力を注ぎ込むと水球は巨大化し、勢いよく放水された。

ゼリーは蒸発し、消え去った。

「やった」

水が扱えなかった零は感動と興奮を覚えながらルルを見た。

「お疲れ様です零様っ」

ルルもすぐに人間の姿に戻り、零に飛びつく。優しく頭を撫でながら零は言った。

「うん、ルルもお疲れ様」

しかし、二人の喜びとは違い、ダイドと燐音は少し厳しい口調で、戦闘を評価する。

「水の刃で切り裂くのではなく、量で蒸発させるという指示は大したものだ。だけど、零、お前うごかなすぎ」

「敵が移動速度の遅いスライム状のものだったからよかったけど、

俊敏な敵では今みたいにはいかないわ。もっと色々動き回って、攻撃に参加しなさい」

「なるほど、その通りです、アドバイスありがとうございます」

「まあ、こんぐらいの魔族なら余裕ってこともわかった。ここは二手に分かれるか」

「少し不安だけど、大丈夫かしら……」

「隣音は零を過小評価しすぎ。大丈夫だよ。俺は瘴気の濃い右周りで山頂まで敵を掃討する。そっちの雑魚共を零に頼む。俺からみて雑魚でも零にとっては気を抜けば命にかかわる連中だ。集中していけ。出来るな？」

「はい。ルルもいることですし」

「がんばりますっ」

「よっしゃ、山頂集合な。この山の頂上にはヤバイ奴がいる。俺らより早くつきそうになったら、先にいかず待っている。確実に殺されるからな」

ケケケ、と笑いながら隣音とダイドは深い霧の中を進んでいった。さっきの厳しいアドバイスは分かれるのを汲んだことだったんだろっ。

どこまでも優しい二人に零は感動した。

「じゃあ僕たちも行こうか」

「はいっ」

二人は薄い霧の中へ進んでいった。

遠く山の反対側から、激しい振動と、爆撃音が聞こえてくる。
きつと凄まじい戦闘が繰り広げられているのだろつ。

打って変わつて、薄い霧のほうでは、さつき戦ったゼリーの群れと、
オーガの軍隊ぐらいしか出現せず、二人は順調に歩を進めていた。

「ルル、疲れてないかい？」

「大丈夫です、二足歩行にも慣れてきました」

「ならよかった。でもあんまり早くついてもなあ。この調子だと…」

さつきより遠ざかったはずなのに、より大きな戦闘音が聞こえてきた。
た。

きつとさらに強力な敵が現れて、上位の呪文を唱えているのだろつ。

「隣音お姉さま、とっても激しいですね」

「そうだね、きつと燃やしまくってるよ」

笑い話をしながら、敵、というより零の嫌いな蜘蛛——（蜘蛛といつてもこの世界の蜘蛛は30cmくらい余裕であるお化け蜘蛛である。普通の人間ならまず恐怖するであろう）を避けながら、余裕をもつて進んだ。少しきこちなかったルルとの会話も、自然になつていった。

弾む会話の中ルルは突如声のトーンをひとつ落とし、たずねた。

「零様には、その、お慕いしてる方、いらっしゃるんですか？」

「え、好きな人ってこと？」

「はい……」

「いないなあ。というか、あんまり社交的なほうじゃないからさ。
こんなに女の子——と話すのはじめてかも」

人魚なので女の子といつていいのか。と一瞬頭をよぎったが、考え

ないことにした。

ルルはその言葉を聞いて、顔をパアッと明るくさせ、飛び跳ねた。

「本当ですか？ルル嬉しいですっ！ ふふふ、零様の初めての女…

…」

ルルはすると滑らかに零に近づき、腕を組む。

「へ、変な言い方しないでよ」

「大丈夫です零様、ルルもまだ――初めてです……」

0 距離左側から腕越して上目使い。零の心臓は2つに増えたかのように、激しく脈打っていた。もちろん零にその言葉の意味は理解できたが、よくわからない、といった表情のみルルに返した。

「ルル、ちよつと、近い、かな」

零はカタコトのようにいった。しかしルルはめげない。

「だってルルは零様の契約相手ですもの！」

理由になっていない、と、言おうとしたが、燐音とダイドの光景を思い出し、言葉を飲み込んだ。ついでに生唾も飲み込んだ。

こんな人気のない森林の奥で、女の子、しかも女子高生と二人きり……そして近い。さらに色々と、当たっている。たぶん当たっているのだけだ。

零の緊張度はすでに限界値を超えていた。汗はいつもよりダラダラと流れ、歩き方はぎこちなく、勿論、会話などではしない。ルルは大量の発汗に気付いた。

「わ、すごい汗ですよ、そうだ、私が綺麗にしてあげますっ」

ムフフフーっ、と口角を上げ、手を零の胸にあてた。

「ル、ルルルルル、ルル待ってまだ心の準備と親からの許可が！」

「さっぱりしましょう零様あんっ」

「うわああああああ」

ルルは、零の全身から汗を吸い取り、手の上にひとつの水玉に変え、

土にまいた。

「どうでしょう零様、さっぱりしましたか？」

「え、あ、うん、なるほど、そうだね水を扱う魔族だもん、水分を一点に集めるなんて簡単……うん、ありがとう」

「あれあれ、零様、ひょっとしてHなこと考えて——」

「ないです！」

「ですよ、失礼しました零様！ あ、零様危ない！」

大きな蜘蛛の巣にひっかかりそうになった零に、とっさに飛びかかった。

突然抱きつかれ、倒れこむ零。その上に全身で抱きつくルル。

水色の長く柔らかい髪が、零の首元をくすぐる。

零の調度胸の部分にルルの胸が押しつぶされるように乗っていた。

「ふう、あぶないところでした零様」

零の耳元でルルは囁く。弾力のある太ももが零の腰骨あたりを包み、零は気絶寸前だった。

「ルル、たのむ、蜘蛛をどっかにやってからはやくどいてくれ、僕の意識がもたない」

「あ、失礼しました、ルルっちらはしたない」

慌てて蜘蛛に水を打ち込み、遠ざけた。急いで零の上から降り、手を差し伸べる。

「ありがとう」

ルルの手をとって立ちあがる。なんとか意識はたもてたようだ。

それにしても、色々と柔らかかった。髪、太もも、それに胸。なんであんなに柔らかいんだ……

「それでもこの服、動きやすいですね。前まで常に胸を貝殻で強く締めてたので。この布一枚だと、締め付けられないですし」

「……あ。。。」

しまった！！忘れていた、この服は僕がイメージした通りに出来上がる。パンツとスカートとシャツとリボンは創造できてたが、上の下着はちゃんと見たことがないので、うまく創造できていなかったのか！やけに当たっているときに柔らかいと思っ……た

零は今までのことを思いだし、意識を失った。気絶である。

ルルは驚き、地面に倒れる前に零を抱きかかえ、水のベッドの上に乗せた。

脈と呼吸を確認し、疲れが溜まったのかと思い、少し休ませることにした。

原因が、直に当たっていた自分の胸だとは知らずに。

15分ほどたったあと、零は目を覚ました。プカプカのベッドに揺られ、心も体も回復したようにみえた。まあ、もともとダメージなんて大して負ってはいないのだが。

「零様、お目覚めですか？」

「僕は気絶したのか、なんて情けない」

「お疲れでしたからね。まだ休まれますか？」

「いや、大丈夫だよ、ありがとう。そろそろ頂上に向かわないと」

「了解しましたっ」

零とルルは山頂付近で歩みを止めていた。

決してさぼっているわけではない。

進めなかったのだ。

なぜなら山頂では、龍とダイドたちが戦っていたからである。

山頂といっても尖っているわけではなく、広い荒野のようになっている。

縦横無尽に駆け回り、激しい攻防を繰り広げる。

あの中に入ったら、絶対に足手まといだ。そう直感した。

「ルル、よく見ておこう、あれが僕たちのたどり着かないと行けないレベルの動きと魔力だ」

「は、はい」

「燐音ええ!!」

空中戦を繰り広げるダイドと燐音。

背に乗ったダイドが名を叫ぶと、燐音は自分の周りに、狐火が6つ出現させた。雄々しく燃え盛る高密度の火球は燐音の咆哮とともに、高速で移動する龍を追尾した。岩のようにゴツゴツした龍燐を、燐音の狐火が砕く。ごおお、と鈍い龍のうめき声が聞こえた。

龍も負けじと、口から巨大な岩の棘を何十発も吐き出す。ダイドは急いで詠唱を始めた。燐音も足元の火輪かりんを焚き付け、さらに加速し、距離をなるべく稼ごうとした。

「この地に住まう大地の精霊、捧げるは25の花、我が声を聞き、応えたまえ!」

詠唱終了とともに、25人の精霊を出現した。巨大な棘にそれぞれ

一度ずつ防御壁を生み出し、相殺する。しかし龍の猛攻は終わらない。鋭いカギ爪でえぐるように襲ってくる。間一髪でそれをよける。

「ダメだ、ここまじや防戦一方になっちまう！ 燐音、何秒もたせられる？」

「ダイドを守りながらだと、多分500秒が限界！」

「上等！ じゃ、頼んだぜ」

「うん、まかせて！」

ダイドは燐音の背を飛び降り、地面に着地する。すかさず龍はダイドを狙うが、燐音の生み出した炎に全身を包まれ、身を翻す。ダイドは目をつむり、詠唱を始めた。全身が青色に発光し、強く輝いている。

龍がダイドを爪でえぐりにかかるが、体に狐火をまとい、燐音がたいたあたりをして防いだ。燐音の20倍（目測40M）はあるであろう巨体が、吹き飛ぶ。ダイドから龍を離すように、燐音の猛攻は続く。龍を追って、狐火の火球をぶつける。大きく悲鳴をあげる龍。

尚も火球を生み出し続け、龍の岩を焼いた。さらに狐火を火炎放射のように全身から発生させ、龍の全身を熱した。

しかし、狐火を放出し続けたものの、翼で風をおこされ、吹き消されてしまう。

一瞬の隙をつき龍は再び巨大な岩の棘を吐き出した。超高速で避ける燐音。ダイドに当たるであろう起動の棘も焼き消したが、一本消しきれなかった。急いでダイドの前に入り込み、体で受け止める。

燐音の悲鳴が空にこだまする。

しかし、瞳は龍を捕らえたままだ。急接近する龍めがけて、巨大なひとつの狐火を練り上げ、ぶつけた。だが、龍は体を焼きながらも失速せずむかってきた。

捨て身の体当たりだ。質量からいって、燐音が受けきれないわけがない。

しかし、ダイドの詠唱はまだ続いている。燐音は最後の力を振り絞り、もう一度全身に火を纏い、龍に激突した。大きな悲鳴を上げ、一瞬失速したが、全身で突っ込んでくる龍の速度はそこまで変わらない。

ダイドまであと10Mない、大きな口がダイドを噛み千切ろうとしたそのとき、詠唱が終わった。天に両腕を掲げ、振り下ろす。空から超巨大な剣が出現し、真上から龍の体を突き刺した。

龍は岩肌から大量の血を流し、山に剣で串刺しになった。やがて召喚された100Mはある剣は消滅し、龍は気を失った。

すぐに燐音のもとに走るダイド。燐音は狐の姿のまま、倒れていた。

「燐音、大丈夫か?!」

「大丈夫よ……ダイドは怪我してない?」

「ああ、おかげさまでな。よくやったぞ!今すぐ治してやる」

駆け寄りながら発動しチャージしていた回復魔法の暖かい光が、燐音の体を包み込んだ。

「師匠、燐音さん！」

「お前らよく待機してたな。調子にのって出てきて、殺されちまったらどうしようかと思ってたところだ、偉いぞ」

「すいません、力になれなくて」

「いや、違うんだよ。当初の予定では、頂上にいるのは龍じゃなくて、オーガの長だったんだよ」

「え、じゃあなんで龍と——」

「俺らがついたらオーガが龍に食われててさ、こっちに気付いたらしく、襲い掛かってきた。本当はオーガで零たちに経験積ませてやるうとおもってたんだが、すまんね」

「そうだったんですか、でも、本気の師匠を見れたほうが収穫です」
「燐音お姉さま、素敵でした！ 命がけで主人を守る姿、かっこいいですっ」

「ふふ、ルルはまだマネしちゃだめよ、死に急ぐことになるわ。無理だと思ったら零と一緒に逃げなさい」

「はいっ」

ところで、と、ダイドは言った。真剣な態度から、いつものニヤニヤとした表情に戻っていた。

「零、こいつの龍燐を使って作る武器、欲しくないか？」

「そんなこと出来るんですか？ ぜひ欲しいです！」

「武器の加工には金が大量に必要なんだがな。こいつはきつとお尋ね者の土龍だ。どっかに引き渡せば大量の金が入る」

零は龍に目を向けた。遠くから見てもその巨体には圧倒されたが、間近で見ると、本当にデカい。龍が倒れたときに巻き起きた土埃がまだ空を舞っている。

こんな恐ろしいものを倒してしまったダイドと燐音の凄さを、再認

識した。

「ありがとうございます。燐音さん怪我は大丈夫ですか？」

「外傷はダイドが治してくれたから大丈夫よ。疲労と妖力切れによる精神的な疲れのが大きいけど、なれっこよ」

そういつて燐音は笑った。こんな激しい戦闘が慣れっこだなんて、一体どういう生活を送っていたのだろう。

「まあ、私が本気を出せば、あんな龍瞬殺なだけどね」

「ええ！？ お姉さま本気出してなかったんですか？」

「燐音は俺と契約するために力を制御してるんだ。本物の妖狐だぞ、下級龍なんぞ赤子同然だよ」

「まあ、100%の力出したらダイドが死んじゃうから出来ないけどね」

「すみません、とダイドは手を後頭部にあて、わざとらしく謝った。

「契約者の容量を契約相手が大幅に超えると、その力に耐えられなくなつて、壊れちゃうんだ。まあ、今の俺なら50%解放程度なら、絶えられると思うぜ」

「その後、三日は寝込むでしょうけど。当分休養も必要ね」

「がははは、そこは秘密にしといて欲しかったな隣音ちゃん」

いや、待てよ、と零は考えた。それなら50%以下の開放で手早く倒したほうが楽だったのでは、と思ったのだ。

「じゃあなんでさつきは開放しなかったんですか？ 20%開放とかすればもつと楽に——」

「500秒あればダイドの詠唱が終わるからよ」

「そんなギリギリの戦いしなくても」

「ダイドが強くなればその分、本当に強いやつと戦うとき、私の力を解放できるの。なるべく経験積んだほうが、お互いのためなのよ」

「隣音さんはなぜ師匠と契約を？」

「ふふふ、零ったら正直ね。普通そこ聞けないよ」

「あ、失礼しました」

「いいのよ、契約を結ぶとね、色々特典がつくのよ」

「特典、といますと？」

「当然、妖力が格段に向上するわ。それと傷の治りも早くなるし、パートナーも得られる」

「でも妖力上がったても開放できないんじゃない意味がなくないませんか？」

「私、本当は——」

そこまでいったところでダイドが、おい、と口を挟んだ。

「何もそこまで言うことないだろ」

「零は私たちの仲間だよ、隠す必要なんてないわ」

「しかし隣音にもプライドってものが——」

「私がいいって言うてるの！」

「な、ならいいけど、さ」

突然言い争いを始めてしまい、零はあせった。きつと触れてはいけないところなんだろう。

「あ、僕いいです、いいにくいことなら。すいませんでした、色々質問してしまつて」

「あら、本当にいいの？ 今は話す気分だけど、明日気になって聞いてきても秘密」とか言つちやうかもよ？」

少し意地悪そうな目で、燐音は言った。

「いや、触れたらいけないところみたいなので……本当にすいませんでした」

「すまんな、零。いつか必ず話す。まあ実際俺たち人間からしてみたらたいした話じゃないんだけどな。種族に誇りを感じる妖怪にとつては、色々あるんだよ」

「ダイドそれ答えいつてない？」

ギロリ、と燐音が睨んだ。自分で言うのはいいんだが、人に言われるのは嫌なんだろう。

「え、あ、マジで？ 零、ルル、わかった？」

「いえ、全然わかんないです、大丈夫です」

「ル、ルルもよくわかりませんでしたっ」

「ふうー。セーフだそうですねお嬢様」

「はいはい。じゃあ、戦利品を引き渡しに行きますか！」

零たちは海を渡り、次の町のギルドに来ていた。

「おまえさんたち、本当にあの土龍を討伐しちまったのかい？」

受付のハゲたおっさんが、目を見開いてダイドを見つめた。あまり信じていないようだ。

「ああ、この収容袋にはいつているよ。出そうか？」

そういつてダイドはちいさな袋を取り出した。オオオクトパスのときもそうだが、ダイドはこのなんでも吸い込む袋に討伐したものをに入れて、ギルド本部に送るらしい。死にかけの気絶以上のダメージを与えないと、抵抗されて収容できないので、そのまま武器にすることは不可能だ。

「いや、いいよ！ ギルドがぶっこわれちまう。へえー、それにしてもあんたがねえ。名はなんというんだ？」

「ダイドだよ」

受付のおっさんは突然腰を抜かして椅子から飛び落ちた。一人でギヤグをやっているような驚き方だ。ルルは少しキモかったのか、零の腕にしがみついた。

「ダ、ダイドというと、あの6尾狐使いの退魔師ダイドつつうことかい？」

「ははは、さすがに土龍討伐つつたらバレるか。その通りだ。俺の隣にるのが、その6尾狐」

宜しく。と隣音は微笑んだ。

「ひえー、マスタークラス（最上級退魔師）なんて初めて目にかかったよ」

マスタークラス？とルルが隣音に聞いた。その間もハゲの賛美はダイドに送られ続けていた。

「上位種との契約者で、尚且つ最高の戦闘技術と退魔力か魔術を扱える者だけに与えられる称号みたいなものだよ。本来ならバッチが

あつてつけてるべきらしいんだけど、それつけると目立つちゃってね。あらゆるところで神様とか、救世主扱いされちゃうから……普段はどっかにしまってるわ。それつけてギルドに行けばいくらでも軍資金は与えられるんだけど、ダイドは性に合わないみたいで、ね」

「ほえー、凄い人なんですね、ダイドさんって」

「人間の中じゃほぼ最強だよ。私と契約できるのはダイドくらい」

「退魔師の人間って数えるくらいしかないんですね？」

零が聞いた。

「うん。ほとんどは魔術師ね。あとは妖怪と魔族と人間のハーフとかかな」

「あ、そうか、退魔力はなくても魔力を持つてる人はいるのか」

「退魔力は魔族により有効、魔術は魔族により有効。覚えておくと戦闘で有利よ」

「それ初めて聞きました、ありがとうございます」

「まあ、結構些細な差だけだね。でっかい術になればなるほど、与えられるダメージに差が出るの。今の零はそんなに気にしなくていいわ。ルルの攻撃はどっちにも有効だし」

そんなこんなで、手続きが終わったようだ。ダイドが戻ってきた。

「龍燐による短刀、作ってもらえることになったぞ。完成次第、俺のもとに転送するように頼んどいた」

「転送とか、そんな近未来的なことできるんですか？」

「ワープ魔法をかけた袋を渡しておいたんだよ。これにいれると自動的に俺の収容袋に転送^{ワープ}される」

「なるほど。今から楽しみです！」

「そいつは良かった。それと、妹さん預かってる仲間から連絡があつてな。元気にしてるから、焦らずに来るといい。だそうだ。こっちにきてから連戦続きで疲れたろう。少し休養をとらないか？」

「でも——」

「疲れからくる判断ミスは死を招く。休むのも練習だ」

「わかりました。師匠がそういうのなら」

「よし、決まりだ！ というわけで」

ダイドが大きく振り返り、隣音とルルのほつを見た。

「海！ 行きますか！！」

燦燦と太陽から降り注ぐ熱光線は、爽やかな波音をより涼しげに演出させる。
さんさん

広大なプライベートビーチを貸し出してもらった4人は現地で水着を調達し、着替え場に向かった。

――男子更衣室――

「師匠、なんかこの水着小さくありませんかって、うわぁ!!」
 零は驚きの声をあげた。初めてみるダイドの裸は凄まじかったからだ。

もともと腕は見えていたので筋肉質であることはわかっていたが、予想の範疇はんちゆうを大幅に超えるその肉体美は、それはそれはすばらしかった。

キュッと引き締まり、余計な脂肪の一切ついていない、戦闘のために鍛え上げられた、戦士の体だ。

傷跡が多いことを想像していたが、魔法ですぐに回復させるためか、そのような爪跡は一切なかった。

「なんだ、突然変な声だして。虫でもいたか？」

「いえ、あまりに師匠の体がしつかりしていたので……」

ダイドは、げえ、と表情を歪めた。

「なんだ、零は男もいける口か?!」

「いえいえいえいえつ、そういうわけではなくてですね、その、理想的だなあと思って。やましい意味はももちろんありません!」
 やましいことは本当にないんだが、慌てて噛みまくってしまう自分が不甲斐ない。

「なるほどな。でも零もなかなか良い体してるぜ」

そんなバカな、と思って鏡を見ると、驚愕した。

自分の体をみたのは、もとの世界での風呂場以来だった。

なんと零の腹筋は6つに割れ、胸筋は適度に膨れ上がり、腕も足も引き締まっていた。

もちろんダイドのそれと比較してしまうとテンでダメだが、以前の自分の体からは考えられないほど、屈強な体の男になっていた。

「いつの間にこんなに鍛えられたんだ……」

「あんだけ激しい戦いしてんだ、自然と筋肉もつくよ。俺も筋トレしてるわけじゃなくて、自然にこの体になったしな」

零が自分の体に惚れ惚れしていると、ダイドは、にまあと笑い、口を開いた。

「それにしてもいいことに気付きましたね、零さん」

「え？」

「俺らの水着がちっちゃいってことは……？」

「……？あつ、女物の水着も——」

「ちっちゃいってことですね！ これは期待だな零！！」

——女子更衣室——

「隣音おねえ……さま？」

ルルはそう口にせずにはいられなかった。なぜなら隣音がさっきから裸のまま、じろじろとルルの体を舐め回すように見つめてくるからだ。

「あの、さっきからなんでルルの体を睨むんでしょうか？」

「耐え切れずに、質問した。少し間を置いて、返事が返ってくる。」

「ずるい」

「え？」

「なんでそんなにスタイルがいいのよ！！」

そういうと隣音はルルの背後に瞬時に入り込み、着替えの途中で何も着用していない豊満な胸を鷺掴みにした。

「ふわあつ、やめてくださいお姉さまっ」

ルルの願いは聞き入れられず、ねっとり、じつくりと胸を揉まれた。
「な　　　　　で　　　　　こ　　　　　ん　　　　　な　　　　　に　　　　　大　　　　　き　　　　　く　　　　　て　　　　　柔　　　　　ら　　　　　か　　　　　い
の　　　　　が　　　　　つ　　　　　い　　　　　て　　　　　る　　　　　の　　　　　よ　　　　　っ」

「そ、それは私が人魚だからです、スタイルは種族の特徴のひとつ
なんです、だから揉むのを、んっ、やめてくださいっ」

「恨めしやー、恨めしやー」

決して隣音の体が貧相なわけではない。スレンダーだし、胸だって
充分にある。

しかしルルの体は、ほかの女性の肉体とは一線を画していた。流石、
人魚の妖怪である。その種族に恥じない、魅力的で、むっちりと、
尚且つ締まってほしいところは締まっている、最高の体だった。

「こんなエッチな体して、零はもう大変ねー」

そう文句をいながらも、指の動きは加速し、揉みだきつづける。
「零様にまだ何もしてもらってません、本当です、あんっ、やめて
ください……いいっ」

ようやく満足したのか、隣音は手を放した。

「ふんっ。いいもん、私にはダイドがいるからね！　零より強いし
かっこいいんだから」

見事な大人気なさである。つい最近能力者になった、弟子である零
と、この世界で人類最強の男を比較。ここまでムキになるというの
は、相当、ルルの色気むき出しの体が羨ましかったんだろう。

しかし、ルルは珍しく食って掛かった。

「たしかにダイド師匠は強いしかっこいいですけど、零様も負けて
ませんよ！　なにせ私たち人魚族を救ってくださった勇者様ですか
らっ」

ルルは顔を赤く染めて声を荒げた。隣音も自分のいったことが、ど
んなに大人げなかったか気付き、顔を赤らめた。

「そうよね、零は最近この世界にきたばっかなのにすごく強いし、
頭もいいし、顔もなかなかイケてる、ごめんなさいねルルちゃん、

言い過ぎたわ」

そこまで聞いてルルも焦った。圧倒的妖力を誇る6尾狐に対して、こんなに強気に口答えしてしまった。本当なら殺されてもおかしくない。燐音がその気になればルルは一瞬で灰になる。

普段、あまりに燐音が優しいため、種族の差を忘れてしまった。

「ももも申し訳ございませんでした！」

「ええ、なんで急に謝るのよ、それはこっちのセリフ。突然嫉妬して胸揉んだのも私だし、零とダイドを比較しはじめたのを私だわ」

「大妖である6尾狐の燐音お姉さまに対して、人魚の分際でこのよ
うな口の利き方、大変失礼——」

「ストップ——！」

ルルが謝罪の言葉を告げようとしたとき、燐音は大きく声をあげ、
ルルの言葉をさえぎった。

「私たちは仲間なのよ。種族なんて関係ない。そんな他人行儀なこ
と云ったら、次は許さないんだからね！」

胸を揉んだときと、零とダイドを比較したときのような、冗談じみ
た言い方でなく、真剣な眼差しでルルを見つめた。

「おねえさまああああ、一生ルルついていきますうつ——！」

ルルは泣き出し、燐音に抱きついた。燐音はよしよしと頭を撫でる。
ルルの胸が燐音の胸と重なった。大きなルルの胸により、燐音の胸
は見えなくなった。その瞬間燐音の優しい表情は一変し、ひくひく
と口角を上げた。

「でもやっぱり——」

「ふえ？」

「このおっぱいはずるいずるいずるいずるいつ——」

「お姉さまあお許してくださいっ！！ああん揉まないでくださいい」

先に着替えの終わった男チームは、アホな教訓ごっこをして時間を潰していた。

「いいか、零。契約者たるもの、他の子に目が釘付け、などは、絶対にあつてはならないことだ!」

「はい師匠!」

「そんなことがあつた日には、ビンタされても文句はいえないだろう、それが女心つてもんだ!」

「はい師匠!」

「きつと彼女たちは自分の契約相手に、褒めてもらいたいと思つているはずだ、わかるか零?」

「今知りました!」

「よおし、耳の穴かっぽじつてよく聞け零!」

零は言われたとおり耳の穴をゴリゴリと大げさにかっぽじつた。それをみてダイドは満足そうに続けた。

「俺に続いて復唱しろ!」

「はい師匠!」

「水着、よく似合ってるね」

「水着、よく似合ってるね」

芝居じみた二人の演技は動きまでついている。アホである。

「あれ、ちよつと痩せた?可愛くなったよ」

「あれ、ちよつと痩せた?可愛くなったよ」

零はどこか恥ずかしそうだ。

「君の水着姿に、この美しい海も嫉妬せざるをえないだろう」

「師匠それは僕にはまだ言えませんか!」

「なぜだ!」

「恥ずかしいからです!」

「そんなんじや全然だめだぞ！ 立派な男になるためにはな――

――」
アホな説教を受けていると、後ろから何してるの？ 燐音が声をかけ
てきた。

すぐに振り向いて、ダイドはドヤ顔できめ台詞を言おうとする。

「燐音、水着よく似合って……」

ダイドはどうやら契約者失格のようだ。

なぜなら、ルルの水着姿に釘付けになって、動けなくなっているか
らである。

「師匠、まずいです師匠！！」

ペチペチと頭を叩くが、まさに釘付け、一向に動く気配がない。ま
るで時が止まったようだ。

大きく丸く見開かれた目から放たれた視線は、ルルのこぼれんばか
りの胸元に向かっていた。

ルルも視線に気付き、きゃっ、と胸を両腕で隠した。ダイドも、は
っ、と我に返り、まるで何事もなかったかのように燐音のほうをむ
いてドヤ顔を決めた。

「燐音、水着よくにあってぎゃあああああああああああああああ
あああああああ」

太陽からくる紫外線とは別に、ダイドは体を焼いた。普段は防具を
着ているが、今回は裸、ダメージは直にくる。並大抵の人間なら、
瞬間で灰になってたであろう火力が、ダイドの体にまとわりつく。

「ちよっとおおおおお、これ洒落にならなああいレベルであっつ
いいいうひょおおお」

走って海に突っ込み鎮火したが、ダメージは尋常じゃないようだ。
プカプカと海面に顔も上げずに浮かんでいる。数十秒して、ダイド
の体を光が包み、傷が全回復された。

「師匠、今回ばかりは味方できません、師匠から学んだ教訓ですか
ら」

零が冷たい視線をダイドに向けた。

「いやあ仕方ない、これが男心ってもんさ。俺の意思とは関係なく目がいつちまうもんさ」

がは、がは、と笑う。まったく懲りてないようだ。

「もう一度燃やされたいようね」

「このたびは大変失礼いたしました」

「よろしい」

後日、ダイドは零に語る。どんな攻撃より、燐音の炎が一番キツイと。他の傷ならすぐに治せるし、反撃すれば攻撃はやむが、燐音を怒らせた場合、燐音の気がすむまで燃やされ続けなければいけないからだ。と。そして零は言うのだ。9割9分師匠が悪い、と。

その後、燐音のご機嫌は意外とすぐに回復し、4人でビーチバレーを楽しんだ。

魔力、退魔力、妖力の使用を禁止した、秩序あるビーチバレーはとても楽しく、まるでもとの世界に戻ったかのような安息を与えてくれた。

一通り飽きるまでビーチバレーを楽しんだあとは、ダイドを砂の中に埋めたり、海で競争をしたり、スイカ割りなどをした。しかし、スイカはダイドの渾身こんしんの一撃によって粉碎してしまい、食べられなかったが。

そんなこんなで、腹がすいたのと、喉が渴いたので、零とルルは買出しに出かけていた。

「すつごく楽しいですねっ」

「うん、とても異世界で命がけで妹にあうために奮闘してる日々を送ってるとは思えないよ。こんなに笑ったの久しぶりだなあ」

にか、っと表情を明らめ、ルルに送った。

「こんなに楽しそうな零様、初めてみました、ルルも楽しいですっ」
ルルも、とびっきりの笑顔を零にお返しした。その顔があまりに可愛いくて、零は長く直視することが出来なかった。

数分話しながら歩くと、店についた。そこで頼まれていた大量のお酒と、自分たちがのむジュースを一本ずつ、それと適当に食べ物とお菓子を買ってかえた。

海につくとダイドと燐音が寄り添って海を眺めていた。遠慮することなくいつもイチャイチャしている二人だが、零たちがあらわれるまでは二人きりで生活していたのだ。気を使って少し時間を置いて

から二人のもとに戻った。

「サンキュ！ 零、ルル！」

「ありがとう」

買ってきたものを手渡す。ダイドは酒を受け取ると、一気に飲み干した。

「くあああ、海で飲む酒は最高だなあ、零も飲め飲め」

そういつて新しい酒を勧めてきた。隣音もぐびぐびとお酒を進めている。酒をのんでいるだけに妖艶に見えるセクシーな隣音に、ルルは見惚れていた。

「いえ、僕は未成年なんで」

「ん、未成年、ってなんだ？」

「20歳になるまで酒は禁止されてるんですよ、僕の世界ではですけど」

「そんなんあるのか、めんどくせー世界だな、こんなにうまいのにルルは飲むか？」

「れ、零様が飲まないようなので、ルルも遠慮します」

ごくつ、と生唾を飲む音が聞こえた。どうやらルルは本当は飲みたらしい。

「そっか、となると零とは酒を酌み交わす前にお別れになっちゃうのか、少し寂しいな」

ダイドの寂しそうな遠い目で海を眺めた。零はきゅーっと心を締め付けられた気分になり、考えを改めた。法律は国ごとによって違う。異世界ならなおさらだ。零の飲まない理由はダイドには理解できないだろう。せつかくみんなで飲もうと考えていたに違いない。

「あの、この世界では未成年とかないんですよね？」

「あつと明るくなるダイド。心底嬉しそうな表情を見て、零も喜んだ。

「もちろんだ！ 郷に入りては郷に従え、だぞ！」

「いただきます！」

「ああ、本当はルルも飲みたかったんです、ルルも飲みますっ！」

「あら、ルルちゃん、そんなに飲みたかったの？」

「とっても、とってもです！」

4人は日が沈むまで飲んで食べて騒いで遊んで語って、日頃の疲れを癒した。

魔法では回復することのない、かけがえのない時間が4人の心を満たしていった。

ゝ1ゝ
(前書き)

第三者視点の多いこの小説ですが、今回は基本的に主人公、零の視点から動かしていこうと思います。

〜1〜

今僕はルルと二人きりで宿屋にいる。なぜかって？
それは数時間前にさかのぼることになるんだけどね。

僕たちは海で遊んでたんだ。

初めてお酒も口にして、みんなで騒いで遊んで、無礼講で楽しかったよ。この世界の人々といつか別れないといけないと思うと、涙が出てしまう。おっと、話がそれた。

それで、日も沈んできたし、そろそろ片付けようってなって、僕がゴミを拾っていたらね、師匠がこういったんだ。

「今日は宿2人部屋をふたつとつといたんだ」

いつもは大体みんなで同じ部屋で寝泊りしている。なのに突然、今日に限ってそんなことをいいます。僕は当然聞いたさ、なんでですか？ってね。そしたら師匠は、

「隣音がな、欲しがってしょうがないんだ。俺のビッグなこのマグナム——痛てててて耳ひっぱらないで」

っていったんだ。隣音さんと師匠は間違いなく付き合ってる。本契約とかいってたから、結婚みたいなものかな。どっちかが契約破棄する前に死んだら両方死ぬとか言ってたし、契約破棄にはお互いの了承が必要ともいってし。むしろ結婚なんかよりよっぽど凄いだからいいんだ。僕は邪魔なんじゃないかと思ってたし、正直に二人きりになりたいといってくることは、とても助かる。

でも問題はそこじゃない。

隣音さんと師匠が二人きりになるってことは、当然僕とルルが二人きりになる。ということなんだ。

部屋についたら、零と話がある。って師匠が言い出してね、20時まで僕と師匠、ルルと隣音さんのペアで分かれてたんだ。

わざわざ二人きりになって僕に話があるっていったから、大変な用事なのかと思ったんだけどね。

宿についたら、師匠は延々と、女性のエスコートの仕方について語ってくれたよ。

僕はまだ16歳だし異世界だし初めてだし妹に会うまではそんなことできないし、とウダウダいつてみたんだけどね、ダメだった。

「そんなじゃ立派な男の子になれないぞ！ もとの世界に戻ったときに、成長し男になった零を家族に送り届けないと、この世界の保護者として顔がたちませんぜ零さんよう！」

とか言ってた。まあ僕も男の子だし、ね。ルルにまったく興味がなわけではないんだ。

人魚だし100歳だけど、見た目も中身も若いし、優しくて明るい性格で可愛いし。

僕にはもったいないくらいの美少女だよ。彼女ですって家族に紹介したら、多分両親は喜びの失神をするだろうね。でもね。やっぱり僕は妹に会うまで、そういううわついたことはしたらいけないと思うんだ。

愛美は安全だって教えてもらったけどね。やっぱり、会うまでは不安じゃないか、お兄ちゃんとしては。もちろん信用してないわけじゃないよ。信頼する師匠の友人だし。でも、やっぱりね。うん、ダメだよ、女の子と遊んでるっていうのは、よくないと思う。

でもルルは仮契約とはいえ、僕のかけがえのないパートナーだし、失礼のないようにしないといけない、とも思う。いったい僕はどうすればいいんだろう。

師匠のエロトークは白熱してたんだけど、約束の20時前になってしまってたね。

「おっと、もうこんな時間か。それじゃあ熱い夜を過ごせよ、兄弟！」

なんていいながら、部屋を出て行ってしまったよ。熱い夜を過ごすのは師匠たちなのに。

あ、まずい、一瞬いかかわしい妄想をしてしまった。隣音さんにバシたら燃やされてしまう！

そのときガチャッと、ゆっくり、ドアが開いてね。ルルが入ってきたんだよ。

まるで新婚初夜のような、少女の瞳で入室してきたルルに、僕はいったいどんな言葉をかけていいのかわからなくてね。もう緊張しまくり……。

ゝ2ゝ
(前書き)

続きまして同じく主人公視点です

く2く

「ややや、やあ、燐音さんのお話は楽しかったかい？」

「はい、とっても／＼／」

なぜか頬を赤く染め、うつむくルル。一体どんなことを吹き込まれたんだろう……。僕も人のこと言えないけど。

「ルル、お風呂はいつてくるね」

もちろん、別にやましい意味は無い。海で体がベトベトだったし、お風呂に入りたかっただけ。ほんとに。

「あ、ルルも一緒に入りますっ」

すぐに叫んだよ。ダメってね。シュン、っとなっちゃってた。別に怒ったわけじゃないし、焦って大きい声でちゃっただけなんだけど、ルルを傷つけちゃったかなあ……。自己嫌悪の嵐の中、体を洗って、すぐに出た。ルルもお風呂入りたいだろうし。

そのあと、

「さっきはごめんね、嫌だってわけじゃなくてビックリしちゃって」
っていったんだ。

そしたら、わかってますよっ、ルルもお風呂入ってきますね。って笑ってた。

そして今。海で飲まなかったジュースと、余ったお菓子を食べながら、この世界のオモチャ、もとの世界でいうならジェンガみたいなので遊んでる。つんであるブロックを引き抜いて上に乗せていく単純な遊びなんだけど、なかなか盛り上がるよ。

いやあ、女の子と二人きりの宿で、ジェンガするのっていつもより緊張するよ。

師匠も奮発して綺麗な部屋をとってるので、まるでホテルみたいだし。

間接照明が、可愛いルルをさらに綺麗に映し出す。

「はい、零様の番ですよ」

「う、うん」

「負けたらなんでも言うこと聞くて約束ですからね」

「う、うん」

「さっきから零様、う、うん、しか言ってますよ」

「う、うん」

「あれ、どうなさいました、手がプルプル震えてますよ」

「う、うん」

さっきお風呂から出たときもう一度謝ったら、じゃあこのゲームで負けたら私のいったことなんでも聞いてくださいって言われて、了解しちゃったんだ。負けるわけにはいかない……

「やった、とれた」

「あー、もう少しだったのに……。では、ルルの番です！」

ルルはこっちを見てニコニコしながら腕まくりをした。パジャマ姿のルルは本当に可愛い。パジャマは僕が創ったから最高に興味に合うんだ。ピンク色のシンプルなパジャマなんだけどね。柔らかい材質で体にフィットしてて、そりゃあもう最高に似合ってる。

「はい、とれました！ 零様の番ですよ」

「う、うん」

ゆっくりと手を伸ばし、慎重にブロックを引く。でもダメだった。

ガラガラと音をたてて、ブロックタワーは崩れてしまった。

「やったー！ ルルの勝ちですっ！ えっへん」

「ルルすっごい上手だね。やったことあるの？」

「さっき隣音お姉さまとお話してる間ずっとこれやってましたっ」
どうりで上手なわけだ。

「さあて、零様、なんでもお願い聞いてくれるって約束、覚えてますよね？」

「う、うん」

うわあ、そのキラキラと輝く眼差しが怖いっ！

「では、今日、同じ布団で寝てください！ 出来れば腕枕つきでっ」
耳を疑った。もっとすごい要求をされるのかと思ってた僕は、即答した。

「あれ、そんなのでいいの？ うん、僕の腕枕でいいのなら、今日一日好きなだけつかってよ」

「ほ、本当ですか！ うわー、言ってみるものですね、ありがあとうございますっ。今夜はドキドキして眠れそうにないなあ」

ぴょんぴょんはねて喜ぶルル。いちいちしぐさが可愛い。僕の理性は保てるのだろうか……

くろく (前書き)

やっぱり難しいんですけどに戻しますorz

「失礼します」

零が寝ているベットに向かって、ふかぶかと、時間をかけてお辞儀をした。

「どうぞ」

もぞもぞとかけ布団の中に入ってくるルル。

同じ部屋のシャンプーを使っているのに、自分からは到底出すことはできない甘い香りが、零の鼻を常時駆け抜ける。

隣を見ると、だれも寝ていないベッドがひとつ。

二人分のベッドが用意されていたので、当然今二人がいるのはシングルベッドである。

冷えていた布団の中が、ルルの体温によって段々と上昇していくのがわかった。

「あの……」

「おっと、そうだ、腕枕つきだったね」

零の腕にルルの頭がのついた。柔らかく冷たい髪、髪と髪の間から出ている冷やっこい耳の感触、プニプニとした頬、そのすべてが、零の腕の上にある。

「うふ」

ルルがあふれ出すように笑う。

「どうしたの？」

「ずっと夢だったんです、零様の腕に包まれて眠るのが……。今日の日を忘れないようにしないと」

そのとき、零とルルの目があった。顔と顔との距離は腕半分程度。

暗がりでもその照れた表情は十分に確認できる。

「幸せです、おやすみなさい」

そういつてルルは眠ってしまった。寝息が零の顔に吹きかかる。喜

びと安心の中眠りについたルルとは違い、まったく眠れそうにない。羊を3000まで数えたときだった。

ルルが両足で零の足を挟んできた。抱き枕のように扱われる零。より一層近づく顔と顔。ルルの弾力あるふとももの感触。

「零様、大好きです……ムニヤムニヤ」

寝言か。心臓が口から出るかと思った。激しく脈打つ心臓をなだめ、零はふたたび羊を数える作業に戻るのだった。

「おはよう、ルル、眠れたか？」

「はい！ すつきり快眠ですっ」

「そいつあよかった、零はどうだ？」

「ははは……」

零は緊張のあまり一睡も出来なかった。目の下に大きな隈をつくり、尚且つ、見事に理性を保つてみせたのである。男の中の男、いや、逆だろうか。そんな二人の様子を見て、瞬時に事態を察知したダイドは、がはは、とわざとらしく笑ってくる。

隣音は零の顔をチラッとみて、ぼうやなんだから。と呟いた。

その後、ギルドに向かい、お互い別の仕事を引き受けた。

なんでも、目的の町へ行ってくれる飛行船が、明日出るらしい。金は十分あるので、それまでの時間つぶしと、社会貢献だ。零は疲れていたものの、ついに念願の妹との再会が果たせるという実感が沸いたおかげで、仕事に熱をいれることができた。遠距離の敵はルルの水撃にまかせ、近距離の敵は零が退魔力で練った剣で切り裂く。コンビネーションにも磨きがかかってきた。ドドノヅギという土の巨人との戦いにもなんとか勝利し、ギルドに戻る。すでにダイドと隣音は戻っていた。

「おお、思ってたより早くかえってきたな」

「成長した証よ。もうすっかり一人前ね」

「ありがとうございます。ルルとの連携も、うまくいくようになってきました」

「昨日の夜の連携プレーのおかげだな！！」

ルルが耳まで顔を赤くし、ダイドのことをペチペチと叩く。

零は焦って弁解した。

「いや、昨日の夜は本当に何にもしてませんよ！」

「あれ、じゃあなんで一睡もできなかったのかな？」

「いや、それはその……」

「やっぱ言えないようなことしてんじゃねーか！ 隠すなよ、このこのっ！ って痛。どうなさいましたか燐音さん？」

「わかってるんだからそれ以上二人をいじめるのはやめなさい大人気ない」

「うーす」

燐音が気を使ってとめてくれた。それが気に入らないのか、ルルのスカートをめくりはじめる。

「や、やめてくださいダイドさんっ」

「ほーらめくれちゃうぞーほーら」

「ダイド……！！」

「うす」

「燐音お姉さま、ダイドさんがいぢめますう」

「ほーらよしよし。かわいそうに、あのエロ親父。あれは本当にめくりたいんじゃないかって、ルルが嫌がってるのを楽しんでるのよ、変態だわ」

「もつと罵ってくれ」

「ダイドさんのエッチー！」

「最高だ、もつと頼む」

「ダイドさんのすけべ！ エロ親父！」

「いい、今夜は眠れない」

「ダイドさんの変態！ 女の敵！」

「ご褒美以外の何者でもないなこいつぁ。最高だ」

「死ね、地獄に落ちろ」

「燐音、そういう心に刺さるのはやめてくれ」

くだらない談笑。ルルもはじめのころと違い、かなりみんなに慣れて来た。とくに燐音には遠慮しているように見えたが、今はよき姉妹のようになってる。零にはそれが、何よりも嬉しかった。

こんな安らかな時間が過ぎ、妹と再会し、ダイドさんの目的を果た

し、もとの世界に帰れる。そんな確信が、どこかに生まれ始めた。
しかし、これがただの嵐の前の静けさだなんて、誰も知る由がない
のであった。

〜1〜

零たちは飛行船の中にいた。

「零様、見てください、雲の中に今はいつてますよっ」

ルルは雲の上から見る世界に、しきりに感動しているようだ。

海で常に生活していたルルにとって、地上や山でさえ珍しいのに、空といったら、そりゃあもう大変珍しい光景。3時間ほど窓の外にかじりつき、いちいち感動しては、零に報告。今は疲れたのか、零の肩にもたれて眠っている。

「ルルちゃん、空にずいぶん感動してたわね」

「初めて見る光景だったようで。今は疲れて眠っちゃいました」

「零、眠ってるからって変なところ触るんじゃないぞ」

「師匠じゃないんだから、そんなことしません」

「そうよ、零がそんなことするはずない——って、私が寝てる
とき触ってるってこと?!」

「隣音、大きい声だとルルが起きるだろ」

「あ、ごめん。じゃなくて。おぼえといてよダイド」

「なんだよ、起きてるときはいいのに眠ってるときはダメなのか」

「零、ルルちゃんが起きたら教えてね、すぐダイドを殴るから」

「零、動くな、なるべくおこさないようにすべての神経を集中させるんだ」

それからまた1時間ほどたち、機内食が運ばれてきた。ルルが食べ物
の匂いで起き上がる。隣音は怒っていたことはすでに忘れて、機
内食に夢中になっていた。いや、もうどうでもよくなっただけかも
しれない。

「おいしいですね、ここの料理」

「最近ギルドの仕事請けまくってるから金余ってたんだよ。一番良い
船の一番いい席にしてある」

「うわ、どうりで。一番良い席なんて一生で一度乗るか乗らないかなんで、かみ締めておきます」

「この世界にいれば零は立派な戦士だぞ？契約者だしな。もといた世界ではどういうやつだったんだ？」

「極々普通の男の子です」

「あはは、零みたいにすごいやつが普通の男の子ってことは、俺がそっちの世界にいったら普通すぎてつまらんだろうな」

「いえ、師匠は戦闘力抜きにしても普通じゃないんで、大丈夫です」

「あれ、今褒められたの？」

「もちろんです」

照れているいるダイドをみて憐音は苦笑いした。どうみてもバカにされてるのに、なぜ気付かないのかしら。

「ルルは零様とお別れしたくありませんー」

ルルが泣きながら抱きついてきた。

「僕もだよルル。帰るときについてくるかい？」

「いいんですか？私人魚ですよ？」

「ずっと人間の姿でいればいいじゃないか」

「ルル、感激でもうおかしくなりそうですっ」

「零、いまいちわかつてないようだから一応いっておくけど、今のプロポーズと一緒にだぞ」

「ええ！ そうなんですか!？」

ダイドと憐音は、 やっぱり。 と肩を落とした。

「ルル、やっぱりもう少しかんがえさせてくれ、僕はまだ若くて色々自分だけで判断できないことも——」

零はそれ以上続けることができなかった。ルルの下唇を噛んで涙をこらえる表情を、それ以上直視することが耐えられなかったからだ。

「僕の負けだ、前向きに検討することを約束するよ」

「ルルは零様の気を少しでもひけるようにがんばります!」

「おお、健気なよい子じゃ……零にはもったいないのお」

「なんでいきなり年寄りみたいな喋り方になるんですか」

「がはは、そんな気分だったからだよ。ルル、いいかよく聞け。男を落とすためにはな、まず裸になり」

燐音の視線が痛かったので、それ以上喋ることは遠慮した。

「か、肩揉んだりうまい飯食わせたり、家庭的な面を出せばいいと思うよ」

「わかりましたダイドさん、ありがとうございます！」

「お、おう。いいってことよ」

しかし、燐音の視線が変わることはなかった。

「おい燐音、いくらなんでもいつまでも怒りすぎだろ」

「違う、わからないの？外に……何かいる」

「いや、俺にはわからないが。零、わかるか？」

「いえ、なにも」

「とてつもない靈力よ、まだ来てないけど、多分、^{ワープ}転送魔法で現れるとおもっ

「転送前に感じることもできるのか、すごいな燐音」

「普通ならわからないわ、けど今回はでかすぎる……」

飛行船の上へのぼり、待機する。事情を話し、戦闘に参加できそうなものは、全員でてきてもらった。

「来るわよー！」

魔方阵が出現する。そのときにはすでに零にも理解できるほどの、靈気を感じることができた。バチバチと音をたて、それは姿を現しはじめる。

「ペガ……サス」

「神聖獣がなぜ……そんなバカな」

戦闘に参加してくれるといった、自称腕利きの戦士たちが、ガクガクと足を震わせている。

「一斉攻撃しろ！」

ダイドの掛け声により、魔方阵に向かいそれぞれ遠距離攻撃を行う。しかし、すべての攻撃が、前方10Mほどで、かき消されてしまった。

「零、お前はここの連中と一緒に飛行船を守れ、わかったな!？」

「は、はい!」

ダイドが続いて、戦士たちに声をかける。

「お前ら、どうせあいつを倒せなきゃ俺らはここで、死ぬ! だつたら死ぬ気で守って見せる、わかったな! 指揮はこいつがとる、こう見えても契約者だ」

絶望に満ちた戦士たちが、輝きを取り戻す。契約者の存在はそれほど大きいものなのだろう。

「魔、妖、退魔、我が血を今捧げん。再びその力を具現せよ。名は白面金毛六尾之狐、我が声に応えよ!」
ハクメンコンゴウムシビノギツネ

ダイドが今までに見たことのない程発光する。

擬態を解除した燐音の姿がみるうちに変化する。2Mほどだった体も猛々しく巨大化し、金毛もより長くきらびやかになった。全身に赤い紋章が浮かび上がり、より一層芸術的な姿に変化していく。普段封印している燐音の力を、ダイドが限界値まで解放しているのだろ。う。いかに危険な相手なのか、すぐに零は理解した。魔方陣から完全に出現する前に、カタをつけるつもりだ。

「ルル、僕から離れないように。常に敵から目を離さないで」

「はい!」

ダイドが燐音に乗り、その背に両手を当てた。青白い光がみるみると燐音に吸収されている。

燐音の前方に禍々（まがまが）しいまでの妖狐の炎が出現し、膨れ上がっていく。紫色の濃い炎の塊は、遠く上空で作り上げられているのかかわらず、飛行船の上にいる零たちのところまで熱気を送ってきた。

「燐音、はなてえ! ! ! !」

ダイドの掛け声とともに、超高密度の熱の塊が魔方陣からすでに半身をだしているペガサスに直進する。何十にも重ねられた魔法の障壁のようなものが現れたが、それを破壊し、ペガサスの体に直撃した。

「やった…か？」

零の隣にいた戦士が呟いたが、もくもくとあがる爆粉の中から、かすり傷を負ったペガサスの姿が現れた。

「燃え盛る3本の柱よ、槍となりて敵を貫け」

ダイドが生み出した炎の槍に、燐音が狐火を巻き付け、強化する。大きくダイドが腕を振り、ペガサスを追尾した。同時に何十発もの炎の塊を発生させ、ショットガンのように乱打する。

炎の散弾で動きが鈍くなったペガサスに炎槍が直撃する。しかし、たいしたダメージを受けている様子はない。

「燐音、直接燃やせるか？」

「視線による直射的発熱は威力が低い、聖獣には効かないわ」

「だよなあ。くそ、スキをつくって大技をあてにしよう」

ペガサスの一撃は非常に重い。高速で移動し、角を使つての突進、カミナリなど、万が一直撃すれば、即死に至る威力である。それにこの開放状態を維持できる時間は短い。短時間で、尚且つ安全に攻撃しなければならなかった。

「零、防御はルルにまかせて、ペガサスに攻撃してくれ！ 退魔の力が効くはずだ」

「わかりました！」

ダイドたちとペガサスの攻撃は凄まじい衝撃波を生む。その衝撃波から、船を守らなくてはならない。ルルの両手はいつでも水盾を召喚できるように、準備してあった。

零も指示通り、退魔の力を練り、15本の紫色をした剣を生み出し、ペガサスにむかい、放つ。

これは短時間できめなくてはならない。零にもそのことはわかっていて。出し惜しみなどせず、対魔力の続く限り、剣を創造し、放ち続ける。

零の剣と燐音の散弾によってペガサスは回避に手一杯になっている。この隙に、ダイドが詠唱を始めた。土、水、雷、炎の巨大な球を生

み出し、ひとつに練り合わせた。そこに魔力と退魔力を注入する。ペガサスが出現した魔法陣があった場所に向かって、その球を投げた。何もなかった場所にその球はぶつかり、もとの魔法陣がもう一度出現した。

「零、燐音、あそこにぶちこむぞ！」

しかしダイドの意識が魔法陣に向かっていて一瞬の隙をつかれてしまう。猛攻の間をすり抜け、燐音の懐に入り込んだ。

「くそっ！」

障壁と炎で盾を作るが、聖獣の角はその盾をもともせず、尖ったそれは、燐音を突き刺す。

悲痛の叫びを上げる燐音をよそに、雷鳴を轟かせ、容赦なく燐音にカミナリを突き落とした。ダイドもろとも感電し、空中から地上に落ちていく。

「師匠！」

「燐音お姉さま！」

二人は声を振り絞ったが、返事はなく落ちていった。もちろん、次に目を付けられたのは飛行船である。

「ルル、かまえて！」

「はい！」

二人が倒せなかった相手を僕たちでどうにかできるわけがない。そんなことはわかっていたが、恐怖に怯える時間さえ、二人には与えられなかった。ペガサスが高速で突進してくる。急いでルルに魔力をおくりこみ、水の龍を作り出させる。うねりうごめく水龍はペガサスを喰らった。水龍めがけて零はほぼ全放出の力で雷を生み出し、打ち込んだ。ルルと零の最大ダメージを与えるコンビネーションである。しかしペガサスは飄々（ひょうひょう）と空に浮かんでいた。

「そ、そんな……」

膝をつく零とルル。二人の頭上をひどく黒い雷雲が覆った。

死を覚悟したとき、ペガサスの下から紫色の炎の柱が出現する。炎に焼かれペガサスは吹き飛ぶ。

「ちょいと……聖獣をなめすぎてみたいだな」

赤い紋章の外側が紫色に染まり、6尾狐はさらに大きな姿になっていた。

「よくこの時間を守りきった、こっからが反撃だ」

そう笑うダイドの姿はボロボロだった。感電により一瞬気絶して、目を覚ましたあと落下しながら回復呪文をかけた。ダイドの全身を磷音が6尾で包んでくれていたおかげで、大ダメージをくらわずにすんだのだ。瞬時に体勢をたてなおし、磷音の力をさらに解放させる。しかし、ダイドの体を磷音の妖気が逆流し、蝕む。雷撃というより、開放により、ダメージを受けているのだろう。

「大丈夫なんですか？」

「大丈夫じゃなくても、やるっきゃないだろ」

そういつて笑って、空に向かった。体のいたるところから血が噴き出している。長くはもたないだろう。零も魔力消耗で崩れそうな体を奮い立たせ、ペガサスの攻撃に備える。遠距離による雷撃は十分ありえるからだ。

「磷音、今から炎を放出し続ける！ 再生させた魔方陣のもう一度戻し、その後魔方陣を破壊する！」

「わかった、でも無理しないでよ」

「おう、わかってら。いくぞ」

残像を残しながらペガサスが接近してくる。あまりに早すぎで目標を定められない。

「これじゃあたるかわからんな……しょうがない、散弾で動きを封じ込めて——」

「待ってください！ これ以上力を放出すると危険です、僕にチャンスをください！」

ルルに残っている力をすべて流し込む。ペガサスを水の檻に閉じ込めた。激しく暴れ回るペガサス。

「あと5秒ももちません！ お願いします！」

「よくやった、お前らあ！！」

ダイドの体からより一層血が噴き出す。しかし口角は上がっていた。燐音の周りからダムが決壊したかのように、紫色した炎が噴き出した。ペガサスを襲い、魔方阵まで一気に叩き込む。ギチギチと音をたて、封じ込められるペガサス。全身が魔方阵に入りきったあと、そのまま炎で破壊した。

飛行船では大きな歓声があがる。

赤と紫の紋章に覆われていた体は金色のみに戻り、体の大きさも元に戻った。

飛行船に降りて、倒れているダイドを寝室に運び、みんなで回復魔法をかける。傷は塞がったが、顔色が良くならない。すこしたってゆっくりと目を開いた。

「おお……飛行船の中か」

かすれた声で、そうつぶやいた。小さな歓声が沸きあがる。

「師匠、やりました、もう安心してください」

「ゆっくり休んでください」

「いわれなくても……ゆっくり休まして貰う、へへ」

「最後の一撃のとき、ほぼ50%近く開放してたでしょ、まったく。今回奇襲で、強力な魔法具なしだったでしょ。心配したんだからね」

「すまんな燐音、心配かけて」

「す、素直に謝られると調子くるっちゃうなあ、もう。何か飲みたいものは？」

「酒」

「ダメ」

「ジューズで」

「はい。ちょっと待ってて」

いそいそと機内食売り場に向かっていった。回復させてくれたみんなに軽くお礼をし、ダイドは零にいった。

「いやあ、危なかったよな。魔方阵の残骸残ってなくて、リカバリできなかったら今頃みんなお陀仏だ」

「あれなんだったんですか。神聖獣っていったい？」

「まあ簡単に言うと精霊の超上位種だな。ほぼ神に近い力をもった霊獣で、神々しい姿としてるから、神聖獣。ペガサスっていう架空の生き物に姿が似てるから、そのままペガサスって呼ぶようになった、この世界を徘徊してる、悪魔みたいなもんさ」

「そんなヤバイやつだったんですね……」

「隣音の全力のがヤバイけどな」

零はゴクリと音をたてつばを飲んだ。想像するのも恐ろしい。

「なにかいいました？」

そういつてジューズを差し出す。

「いえ、なにも。お、サンキュー」

「あの勢いだと、2日くらいは気絶するかと思ったけど、全然大丈夫そうね」

「俺も成長してるってことさ！」

ふふふ、と笑いながらダイドのベッドの中にもぐりこむ。

「今日はもう寝るわ、私たち疲れちゃった。二人も疲れたでしょ。お隣どうぞ」

本来は飛行船なのでベッドはないが、特別においてあったふたつを貸してくれた。

隣音の好意に甘えて、零とルルも眠ることにした。同じベットでまた眠ったが、今度は疲れもあってか、ぐっすりと眠りにつくことができたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3561v/>

今日から僕は退魔師なのか！？

2011年8月28日04時08分発行